
動物の王国

虹乃 咲

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

動物の王国

【Nコード】

N0806S

【作者名】

虹乃 咲

【あらすじ】

動物嫌いの夏希が動物がうようよいる世界にトリップしてしまった。動物好きな女の子ならともかく夏希は動物が好きじゃない。そんな女の子が動物の国で奮闘します。動物の世界にトリップしてしまっ話はいっぱいありますが動物を溺愛する話ではありませんので注意を。完璧にギャグが入ってます。

部活が好きなただの女子高生です（前書き）

この話は動物が嫌いな主人公という設定なので動物が大好きだぜ
という方は不快に思ってしまうかもしれませんが

すみません・・

書きたかったんです！

部活が好きなただの女子高生です

真夏の太陽は日差しが強く、直視できない。

ある者は熱中症で倒れ、またある者は部屋から出ないで涼んで
いる。

そんな燦々と降り注ぐ日光の下、少女たちの軽快な足音と共に励
まし合う掛け声が聞こえる。

「ファイトー」

「ナイスパス」

その中で一番聞こえる声は部長の大隈おおくま なつき 夏希だ。

大隈という名字の割には身体は平均女性より小柄なため、よくか
らかわれている。

年中、部活で外にいるため肌は小麦色に染まっている。通常、女
性は焼けるのを嫌うが本人は全く気にしていない。だが最近出来始
めた鼻の上の雀斑は少し悩みのタネだ。

「夏希、シュート」

「とりやつ」

受け取ったパスを見事ゴールに打ち込む。

「ナイス」

仲間と手を合わせ笑顔で応えた。部員もまるで自分がシュートを決めたように喜んでくれる。

それが彼女の日常。

ハードな練習も終わり皆で雑談しながら片付けていた。
今日の日差しのせいで元々焼けていた肌に新たな赤みが増す。だ
が片付けをしている彼女たちは気にしていない。

「やっぱハンドボール部は最高だあ」

「聞き飽きたっつの、夏希」

夏希はボールを一つ一つ丹念に磨いて片付けた。たわいない話を
しながら片付け終わり、帰る支度をしていた時だった。

「あ、かわいいー」

友達が急に声を上げたため、皆が一斉に見ると校門の脇に小さな

柴犬がいた。

何か地面を肉球でばし叩いている。

「何あれ、かわゆすぎ」

「あ、うん。そだね」

騒ぎ出す部員を尻目に夏希は一步引いた。

どうやら犬は首輪もしていなく野良犬だろう。しかし毛並みは整っているし、薄汚れてもいない。

犬は騒ぎだしたこちらをじっと見て伺っていたが皆で校門に行くと人が大勢で来て驚いたのか、道路に飛び出した。

「あ、危ないよ」

「つの、阿呆がー」

「な、夏希！」

夏希が部員一の俊足で地面をかける。

道路に出た犬を抱えた。犬は少しじたばたしたが夏希は無理に抑えた。

「つたく、だから」

溜め息をついて抱え直した。

「夏希、危なっ・・・！」

その声に道路の真ん中に突っ立った夏希は振り返る。

目の前にトラックが迫っていた。

アドレナリンが大量に出て周りがスローに見える。
何か友達が叫んでるのが聞こえる。だけど何を言ってるか分からない。

ただ目の端に顔に手をやる友達や恐怖の顔で自分を見てたのが他人事のように見えた。

部活が好きなただの女子高生です（後書き）

連載をいくつも書いているのにまた連載を増やしてしまう駄目加減・

もう助けません

誰もが死を確信した瞬間、トラックが耳を劈くつぎブレーキ音とクラクションを鳴らした。

「おい、気をつけろよ！」

「は、はい」

犬を抱きかかえながら呆然と夏希は返事をした。

トラックの運転手は毒づきながら去っていた。生温かい排気ガスが千夏の髪を揺らして行った。

「夏希、大丈夫！？」

反対側から涙声がかかる。
見ると腰を抜かした友達が涙を流しながら心配している。

「あー、うん」

聞き慣れた声に安堵して夏希はやつと動きだした。

しかし犬が気の緩んだ夏希の腕からするりと抜け地面に立った。

「つたく、もう迷惑かけるなよー」

夏希はしっしと追い払うが犬は何故か夏希をじっと下から見上げている。

「なんだよ」

夏希はもう用は済んだとばかりに皆の元へ戻ろうと犬を無視し立ち去ろうとしたが犬は夏希のズボンを口で引っ張る。

「離せっつの」

「くうーん」

「くうーんじゃない。甘えた声を出すな」

小さな身体の癖に力が強い犬に引きずられて工事中で穴が開いているところに連れて行こうとしているようだ。

「ちょ、ちよつと待て。私はお前を助けたんだぞ。それなのにこの仕打ちは無いだろう」

後ろから友達の笑い声が聞こえる。普段から動きや小柄な体格が犬に似ていると言われている夏希が本当の犬に懷かれているために笑っているのだ。

先ほどの心配なんてこれっぽっちも無い。

他人事だと思って、ぐぬぬと犬と根競べをする。部活で鍛えた筋肉で踏ん張るがずるずる少しずつ真っ暗な穴に近づく。

「待つんだ、犬よ。さっきの態度は謝ろう、だから離してくれ。離してくれたら美味しいご飯をあげよう」

美味しいご飯で犬の耳がぴくりと動いたが動きは止まらない。

「夏希、危ないよ！」

本日二度目の友達の悲鳴を聞きながら犬と一緒に足が暗闇の中に入った。

なんとか踏ん張るがこの犬は見た目より重いのか、犬がつかまっている足に体重がかかる。

なんとかもう一方の足と両手でバランスをとろうとしたがバランス感覚が乏しい夏希は真っ暗な闇にとダイブする。

「の、のおー！！！」

せつかく一難去つたのにまた生命が脅かされた。

もう助けません（後書き）

一難去つてまた一難・
これが人生・・・ふっ

悪夢でしょう・・・

だから動物は嫌いなんだ。

何を考えているか分からないし幼少期に何度も犬に追いかけ回されて酷く嫌な思いをした。家の近くには猫が住み着いて猫独特の匂いを発しているし、近くの木に巣を作っているカラスの鳴き声はうるさくて勉強にも集中できやしない。

しまいには今日の犬だ。無害な顔をして穴に突き落とすとはやってくれる。こっちはお前の命を助けてやったというのに。

夏希はうなされながら静かに覚醒した。

「う・・・うん」

ぼんやりと目をあけると動物の絵が描かれた壁が広がる。子供向けの絵のようで可愛らしく描かれていて子供が喜びそうだ。

「・・・は？」

一気に目が覚めた。ちょっと待て、自分の部屋はこんなファンシーな部屋じゃない。

身体を起こすと夏希が5人寝転んでも余る大きなベッドに寝ていた。ふかふかの枕は何故かライオンのカバーだ。他にもシマウマやイルカの枕もある。

「なんじゃ、この地獄はーっ！」

動物が好きだったりふわふわ乙女には嬉しい部屋かもしれない。だが夏希はピンクが大好きな乙女でもないし動物など触りたくない。だから部屋には動物の小物など全く無いし動物も飼ったこともない。

「どうした！」

夏希の悲鳴に誰か駆け込んできた。
血相をかかえて来た男性は男の癖に千夏とは対照的に肌が白く見
事な銀髪は腰に届くまでである。睫毛も長く染み一つない顔は周りを魅
了する。

うん、以前までは髪の長い男なんて不潔だと思っていたが、この
人物を見ると髪が長いというのも考えものかもしれない。

夏希は一目見て羨ましいと思った。

「うわ、すごい美形」

「何を言う。お前みたいにモモンガみたいな円らな瞳の方がいじら
しいぞ」

「・・・は？」

たっぷり三拍あいた。

この男は馬鹿にしているのだろうか。誰がモモンガだと、それは褒
め言葉じゃない。むしろ貶しているだろうか。

「あんだ、馬鹿にしてるでしょ」

「いや、お前のリスザルのように小さい身体は可愛いと思うのだが」
「馬鹿にしてる！」

どこの誰がサルに例えられて嬉しいのか。周りから夏希は小型犬のようだね、と言われただけでも鳥肌がたつというのに動物に例えるのは止めて欲しい。

「ってか、あなた誰よ」

「ああ、私はこの動物王国第184代目国王だ」

「・・・は？」

夏希は何回目かになるか分からない言葉を発した。

悪夢でしょう・・・（後書き）

モモンガはなかなか可愛いと思うけど・・・

格好いいは罪なのか

今度はたっぷり5拍もあいた。

「・・・は？」

「だからこの動物王国の現国王だと」

聞き取れなかったのか、と今度は一文字一文字ゆっくり発音してくれる。

耳の悪いお婆ちゃんに優しいね、うふと言いたいところだが、いや、聞こえましたとも。その国王っていうのは、ね。
だがしかし！動物王国とは何ぞや。

夏希はしばらく考えていたがある結論を導きだす。

ああ、もしかして動物を飼っているということか。それできつと支配的な気分になってしまっって残念な考えに至ってしまったのだろ
う。

夏希は可哀そうな物を見るような目で見つめた。
わかってる、わかってるよ、あなたの気持ちは痛いほど分かるよ。
慈愛の目で見つめてあげた。

「なんだ、その目は」

「大丈夫よ、私と一緒に精神科に行こうね。大丈夫、先生は優しく
あなたを受け止めてくれるよ」

「なんだ、その精神科とは」

「あなたみたいに、ちょっと危ない人を正常に立ち直らせてくれる
ところ」

「私は正常だ」

始めは皆、そう言うんだよねと頭をうんうんと振る夏希に男が怖
い形相で肩を掴んだ。

「私は大丈夫だ」

「は、はい」

あまりの形相について頷いてしまったが夏希の頭の中にはまだこの人が危ない人物であると初っ端からインプットされている。

掴まれている肩を見ながら、どうやって離れようかと試行錯誤している。目の前の男は端正な顔を崩して、でれでれとした顔になる。頬を薄いピンク色に染め上げ、上気している。何だか息も荒くなってきた。身の危険を感じる。

き、きしよ・・・

さっきまで格好良かった顔を返してくれ。

自分の顔ではないが、ついそう思ってしまった。

「お前は本当、潰れたヒキガエルみたいに可愛いな」

・・・は？

「・・・ふ、ふ」

突然笑い出した夏希に掴んでいた手を外して顔を覗きこむ。
もしかして悪い物でも拾って食べてしまったんだろうか、心配し
ておろおろし始めた。

「ふざけんなあ—————！！！！」

だが次の瞬間、腹から出された声と一緒に強烈なピンタが飛んできた。

無防備に夏希の顔を覗きこんでいた国王は夏希の渾身の一撃を為す術もなく頬で受け止めた。

格好いいは罪なのか（後書き）

ヒキガエルは乙女には禁句でしょう

いや、ヒキガエル愛好家が女性の中にはきつといるはずだからOK
です

カエルの子はおたまじゃくしです

ヒキガエルは無いだろう、しかも潰れたときた、花も恥じらう乙女に対して。

せめてモリアオガエルにしてくれ、あの国指定の天然記念物に。

だけどカエルの肉は人間の肉に似ているというし、いいのかい
いやや自分、妥協はいかんだろう。カエルと言っても所詮はカエル。
カエルの子はカエルだ。
何だか自分がおかしくなってきた、それもこれも全てこの男
のせいだ。

夏希は倒れて意識を失っている男を肩で息をしながら見つめた。

なんなんだ、この男は。

人をモモンガと言ったりカエル、いやヒキガエルと言ったりしてヒキガエルという言葉に根を持った夏希はもう一生カエルなんて見たくないと思った。カエルが悪いわけではない、この男が悪いのだ。しかしもうカエルは見たくない。

しばらく足で男を蹴飛ばしていると廊下からまるで横綱が走って来るような音がして扉が勢いよくあいた。効果音をつけるなら「バーン！！」だ。

「兄様、今の雄たけびは何なの」

これまた整った顔立ちの男の御成りだ。しかも兄弟そろって失礼な奴らだ。

乙女の声を雄たけびだとは甚だしい。

自称国王とやらの意識が戻ったので外でお茶を飲みながら話を聞くこととなった。雲一つない空は青く澄んでいて夏希の心とは違って晴れ晴れとしている。

「で、動物王国だって?」

夏希がローズティをちびちびと飲みながら冷たい目で銀髪の男を見る。男はもじもじとした様子で夏希を窺っている。

きもい、顔でそれを表すと大の大人なのにしゅんとしている。

「ああ、国王のフランシスだ。こっちの弟がアベルだ」

「あの時はどうも」

「あの時?」

はて、こんな茶髪のいかにも外国人風の男と出会っただろうか。こんなに目立つ顔なら会ったら絶対に覚えていると思うのだけれど。夏希はアベルの顔を凝視する。茶髪で緑黄の瞳の顔は一見すると可愛い犬のように見えるが、如何せん、そんなことを言ったら

犬に失礼、いやアベルに失礼だろう。

「あれ、分かんない？ほら、車が来た時に助けてくれたでしょ」

「全く、身に覚えがないんですけど」

「えっ、健忘症？」

確かに夏希は授業の内容を忘れてしまうことはあるが、そこまではひどくないはずだ。ちゃんとノートを見れば思いだし、そんな歳ではない。

まだ高校生なんですけど、心の中で毒を吐くが顔には出さない、それが大人のマナーだ。

「失礼だろ、アベル」

「いや、あんたの方が失礼でしょ」

会話に参入してきたフランスをじと目で見る。

動物に例えられるくらいなら、まだ人間要素のある「健忘症」の方が嬉しい。

「私のどこがだ？」

「発言全て」

「なっ・・・！」

口を開けてぱくぱくさせている阿呆を放っておいてアベルに向き直る。

「どこで会った？」

「今日、学校の前で」

「今日・・・私、犬しか助けてないけど」

こんがりと焼けた大きなクッキーを頬張りながらアベルに問う。

隣で「おお、まるで口いっぱいに物を詰め込んで歩くこともできないシマリスのようだ」とうつとりしている奴はこの際、視界に入れないで空気として扱うことに決めた。てか、表現がいちいち細すぎる。なんだ、歩くことができないって。

確かに色はアベルに似ているかもしれない、だけど助けたのは人

間じゃなくて犬だ。

「あ、そうそう、それが俺」

「・・・は？」

食べていたクッキーが夏希の手を滑り地面に落ちた。

カエルの子はおたまじゃくしです（後書き）

カエル愛好家の方々、すみません

こんな言葉を見て不快に思うことでしょう・・・

あの円らかな瞳、ぴょんと跳ねる姿がいじらしいと思っていちっしやることでしょう

だがまだ未熟な虹乃には分かりません

まだまだ精進がたりないようです・・・

犬は犬でも・・

まだ半分以上も残っていたクッキーが柔らかな芝生の上にぽとりと落ちる。

「あ、勿体ないよ」

「・・・ごめん、もう一回言ってくれる？」

「え、だから勿体ないって」

「その前じゃ！」

「うーんと君に助けてもらった犬が俺ってこと？」

そう、私が聞いたかったのはその部分だ。

だが聞いたところで理解は出来ないかもしれない、というかこの男も自称国王の弟だけあって可哀そうな人なのかもしれない。それ

ともふざけているのだろうか。

第一、この兄弟は全くと言っていいほど似ていない。髪の色からしてもそうだし、顔も別物だし醸し出している雰囲気違う。アベルの方はふんわかと言っていいがこちらの銀髪、フランススは冷たい感じた。そんな2人が兄弟なのだろうか。

だが、今は置いておこう。それはたいして問題じゃない。

「その犬があなたってこと？」

馬鹿にしながら眉を上げる。魔法じゃないんだし、どこの世界に人間が犬になると言うのだ。魔女に野獣にされた話の方がまだ信じられる。

いや、もしかしてこの人、爽やかな顔をして実は犬志願？まさか女王様という仮面で顔を覆って際どい服を着た飼い主に鞭で叩かれることに悦びを見出している犬という名の奴隷！？

はっと口を押さえて椅子から立った。

そして急に立ち上がった夏希に驚いているフランシスを穴があくほど見る。

「もしかして、あなたが女王様!？」

夏希は確信したように2人を交互に見る。

自分はもしかしてアブノーマルな世界に連れ込まれようとしているのだろうか。いや、まだノーマルでいたい。鞭なんて使いこなせないし、痛みを求めるようなことはしたくない。

「何を言っているんだ」

座るように夏希の手を取ろうとするフランススの手をかわし、回れ右をしてクラウチングスタートの構えをとる。

「お、おい」

フランススの掛け声を合図にスタートダッシュを切った。

後に残されたのは出した手を引っ込めるのを忘れてそのまま固ま
っているフランスと腹を抱えながらクッキーを喉に詰まらせてい
るアベルだけだった。

犬は犬でも・・・（後書き）

鞭で叩かれ蝋燭の火で悦ぶなんて・・・
虹乃にはできない・・・！

もさもさ

走っても走っても見えるのは白い大理石の壁、あのだ変態兄弟から逃げたはいいものの夏希は完全に迷ってしまった。

「ここどこ？　つか日本にこんな城が建つてるとこなんてあつたっけ」

ようやく走るのをやめて辺りを見回してみる。

高い天井にどこもかしこも輝いている廊下、猫の銅像や青銅の犬の耳をつけた鎧、色とりどりの鳥の絵画がそこらじゅう至るところにある。

金持ちの家に見られる物ばかりだが、ちょっと待て、あきらかに動物が混じっている。

「なんでパンダの花瓶・・・」

パンダの頭から見事な花が咲いている、それを見て夏希は脱力した。

「おかしいだろ、何なんだここは」

うへえーと舌を出しながら手当たり次第に部屋を開けてみる。

出口が分からないのだから近くの部屋の窓から外に出て帰ればいい。そして変な人がいると警察に訴えればいいだろう。

すぐ近くの部屋から幼い声が聞こえた。

もしかしてあの変態に捕えられた子供かもしれない、夏希は正義感から扉を開けた。

「うっぎゃあああああああー!!」

だが中にいたのは一面の白、そこには赤ちゃん兔が部屋一面にいたのだ。

もさもさとしていて可愛らしいな、なんて思っこともなく、夏希は盛大な悲鳴を上げる。

その声に驚いた兎たちは一斉に後ろへと飛び跳ねた。
その動きにまた夏希はびくりとする。

だ、だめだ。跳ねる動物だけは駄目だ。
動物自体あまり好きではない夏希だが、跳ねる動物は一番嫌いだ。

「う、そのまま動いちゃ駄目だぞ。いいか君たち、動いたら私が死んでしまうからな」

手のひらを向けて兎たちの動きを制して逃げようと扉を引こうとしたが外から聞こえた声に思わず扉を閉めて自分の逃げ道をふさいでしまった。

「どうした！？何があった？」

「うるさい、変態。黙れ」

「へ、変態だと。私はフランススという名がある」

扉をしっかりと両手で塞いで鍵を閉めた。

ドンドンと叩く音が聞こえたが聞こえないふりをして、もさもさ達と対峙する。

赤い瞳がこちらを怪訝に窺っている、きょとんとした仕草が人間のように愛らしい。だが今はそんなことを考えている場合ではない。

夏希は兎たちの後ろにある窓を見た。

大きな窓は外に続いているようで、ここから見える青い空が眩し

い。

「くそう、シャバに出たい」

だがその外という名の自由を手にいれるにはこの看守共の壁を越さなければならない。自由を手にするにはいつも障害がつきものだ。

「いいか、絶対に動いちゃ駄目だぞ。絶対に、そこを一步たりとも動いてはならない」

動物相手に本気になりながら摺^すり足で窓際に寄る。短い距離なのにまるで長距離走のようにひどく疲れる。いや、長距離以上だ。

ああ、自由が、私の自由が見えてきた。

窓の鍵に手をかけ、いざ羽ばたかんとしようとしている時に目の端で白い物が動く。

ま、まさか、ギギギと顔を動かすと、ちょこんと小さなベイビー兎が夏希の足元に座っている。興味津津の瞳が夏希に真っ直ぐに向いている。

純粋な瞳だ、全く曇っていない。

だがそれは他の機会の時に向けてくれ。

「ストロップ、そこで止まれ止まるんだ、ジョージ」

ジョージとは誰なんだ、自分でも分からないが口が勝手に動くのだ。仕方がない。

しかし夏希が勝手にジョージと呼んだ小さな兎は嬉しそうに跳ねて喜びを全身で表そうとする。しかもだんだんと夏希に寄って来る。

「ひっ、ぬおおおう。駄目だ、近寄ってはいけない。いいか、私は動物に触れたら死んでしまう病なんだ。君なら分かってくれるだろう」

はてそんな病気があっただろうか、もはや夏希の頭に「正常」という言葉はない。あるのは「逃走」という文字のみ。

だがそんな夏希の気持ちも虚しく、兎は夏希の足にすりすりとなにかい身体をくつつけた。

その瞬間、夏希の視界がブラックアウトした。

もさもさ（後書き）

兎は可愛いでしょう・・・
ですが虹乃も跳ねる動物には少し、トラウマがあります・・・
それはおいおいね

悪質なセールスマン

また魘^{うな}されながら覚醒すると、先ほどと同じベッドの上だった。
何故かカエルの枕が増えている。

やめてくれ、切実に。

君に届かない想いを胸の内にしまう。

溜息をつきながら、ゆっくりと身を起こした。

今度は驚かないぞ、ファンシーな部屋に飽き飽きしながらも扉に
手をかける。

開けて・・・閉めた。

閉めた扉に手をかけながら冷静になる。

い、今、何か変な物が見えた気がするが、いや気のせいだろう。
気のせいであってほしい。

もう一度、扉に手をかけて今度は慎重に開く。

・ ・ やっぱり現実らしい。

目の前には大きな熊が警備服を着ながら扉の脇に立っている。夏希よりも二倍は大きい熊に身の危険を感じる。

これは確実に一呑みでいけるな、きつと熊の頭の中はそれで一杯なんだ。

自分の死期を悟った夏希のくりつとした瞳から大粒の涙が出る。ついでに鼻から口にかけて透明の架け橋も出現した。

手で拭くも後から後から溢れてくる涙は止められない。

せつかく犬を助けて、いい行いをしたのに突き落とされて目が覚めれば変態に囲まれて、逃げようとしたら兎にもさもさされて散々だ。

「ふいー、ひっく、じゅる」

鼻をすする音は乙女にあるまじき行為だがこの際言ってられない。どうせ熊に食べられるのだ、せめて熊が食べる気をなくす顔で食われてやる。

そして目の前に影が差した。

いよいよか、と諦めてぎゅっと目を瞑るが何も起こらない。

恐る恐る目を開けると熊が夏希にハンカチを差し出していた。しかもピンク色できつちりと折りたたまれている。

「へっ？」

真っ赤になった目で見つめると熊がそのハンカチで夏希の顔を拭いてくれる。大きな手で頑張って小さな夏希の顔をこしこしと優しくこする。

「ちょ、ぶっ」

為されるがままだったが、動物にあるまじき行為に言葉を発しようとするが顔を拭かれているため出来ない。

ようやく拭き終わった熊が離れてまた扉の脇に立った。しっかりと直立して身動き一つしない。うむ、できた熊だ。

「あ、あのー」

夏希が声をかけると顔だけこちらに向けて夏希の言葉を待っている。

真顔で見られるとやはり怖い。

「拭いてもらってありがとございました」

恐々お礼を言つと気にするなと言つように頷いた。そしてまた顔を戻して直立する。

以外にいい奴かもしれない、熊という動物は。

夏希が初めて動物に好感を抱いた時だった、その熊さんが深々とお辞儀をした。

何が来たの、扉から顔をひょっこり覗かせるとあの銀髪男が雄大に歩いてきた。そんな彼と扉越しに目が合う。

条件反射で扉を閉めようとするが、閉まらなかった。

視線を下に向けると足が見える、横に立っている熊さんの茶色い足が。

お前は悪質なセールスマンか、さきほどの恩を忘れて夏希は熊を睨むが当の本人は素知らぬ顔だ。

これが自宅だったら不法侵入で訴えられるが、ここは夏希の家じゃない。

夏希は泣く泣く国王の訪問を受けた。

女王様ではなく国王様

入ってきたフランスと3mほど距離をとりながら落ち着いて話をすることにした。

「なぜ、そんなに離れる」

「いえ、離れてません」

フランスが夏希に近寄るとその分だけ夏希が離れる。その繰り返しを続けるとフランスはもう諦めて長椅子に腰を下ろして顔を向けるだけにした。

「では少し聞いてくれるか」

「鞭とかそういうのは勘弁です」

「・・・は?」

埒が明かないといった様子でフランシスが溜息をついた。夏希に聞こえる深い溜息に夏希はむっとする。

なんで残念そうにされないといけないのだ。

たいそう遺憾に思うが黙って話を聞くことに集中する。もしかして変態と思っていた人物は工事中の穴に落ちた夏希を助けてくれた思いやりのある人物・かもしれないのだ。

まあ、そんな考えは無かったが。

「まず始めに不肖の弟、アベルを救ってくれて礼を言う」

「いや、だから助けて・・・」

ない、と言おうとするのにフランシスの銀色の瞳が黙っていると訴える。

なんだよう、少しくらい話したっていいじゃないか。不満を顔に出すがフランシスは続ける。

「そして謝罪を。お前が寝ている間にアベルから全てを聞いた。あやつはお前に助けてもらったため、こちらの世界で礼を尽くそうと思っ

て承諾なしにつれてきてしまったと」

「ちょっと待って。こちらの世界って？」

もう訳が分かりません、先生。この足りないおつむに新たな知識が入るスペースを下さい。そうしないと頭が爆発しそうです。

「この世界はお前が住んでいる世界とは違う。ここは動物が統治する世界だ」

「えっと、確かに動物はいたと思うんですが動物が統治してるって？」

「説明するよりみてもらった方がいいな」

そう言つとフランスは徐に服を脱ぎ始めた。おもむろ

「ちょ、やっぱり女王様なの！？その服の下に黒い衣装が？いえいえ、私はまだ正常なんです、正常でいさせてください」

手で顔を覆つて新しい新境地など見たくないと言首を振る。

だが何も起こらない、鞭のしなる音も聞こえない、何の物音もしないためこっそり指の隙間から覗いてみた。

そこには銀色の牡鹿がいた。

大きな角は天を向いていて、身体の斑模様はあちこちにあるので

はなくて、まるで意志があるように整って真っ直ぐだ。銀色の瞳は賢さを讃えているし、耳は何一つ漏らさないというようにぴくりと動いている。

「きれい・・・」

その言葉にゆっくりと牡鹿が尊大に夏希に近づいてくる。自分の美しさが分かっているように、もったいぶるように、だ。

瞳が訴えている。どうだ、例えようもない美しさだろう、と。

夏希は驚きのあまり固まっていたが鹿がこちらに近づいてきたのを見てにっこりして叫んだ。

「来ないでっ！-！」

その言葉に銀色の鹿が歩みを止めた。

今、何と言ったと混乱しているように目が泳ぐ。そんなことは言われたことが無いのか戸惑っているようだ。

だがそんな鹿の様子を気にもとめないで夏希は尚も続ける。

「絶対によらないで。いい、そこから動いたら本気で許さないから」

そう言っただけで壁に虫のように張り付く。そして壁に沿って歩きながら扉へと向かう。視線は鹿に釘付けだが、それは鹿の一挙一動を見守っているだけであって見惚れているわけではない。

扉に辿りつくと、ゆっくりと鹿を驚かせないように静かに扉を開ける。

最後まで睨み合いながら背中から出て行く、だが何か温かい物がお尻にぶつかった。右手で扉を閉めながら左手でそれを触ってみる。なんか硬い、けれど肌触りはいい。

何だろう、と振りかえってしまった。

そこには、あの扉の脇にいた熊さんが後ろにたっていた。それはもう、何の表情もなく。

「つつ、ふんにゃあああああああ!!」

夏希は扉を閉めて中にこもって震える手で鍵をかけた。

なななな、何で熊さんが、いや先程もいたんだから当たり前だろうけど何で後ろにいたの？てか、触ってしまった、すごく毛並みが良かった・・・。

だってステレオタイプがあるんです

一人で動物に触ったことにあわあわしている先程の落胆ぶりなど無かったように牡鹿が夏希を見ていた。

「・・・駄目よ、駄目。本当に、半径5mは近寄ってはいけないというルールが私の中にはあるの、お分かり？」

涙ながらに訴える。

左手をぶるぶるとさせながら、その手をどうしていいか分からなく持て余している。

だが鹿は首を緩く振ると淡く光り出した。暖かな黄色い光が全身を包み込んで、人間の形を形成していく。

「うにゃあああああ！！」

銀色の牡鹿が人間になった瞬間、夏希は顔を真っ赤にして叫んだ。

「ふ、服を着てえ！」

細い割に筋肉質な身体がぱっちりと目に入ってしまった。
急いで顔を背けるが、これは夢に出てきそうで嫌だ。

「すまない、つい忘れてしまう」

「もう着た？」

「ああ」

「本当？」

「ああ」

服を着たフランスに何度も念を押して聞いた。
ようやく夏希は背けていた顔を戻した。

「で、分かったか？」

「あなたが変態ってこと？」

「違う！私達の姿は動物のものだと」

ちょっとした冗談だったのに力一杯否定された。そんな残念そう
な子を見る目で見ないでよ。

「ま、まあね」

目の前で人間が動物になるのを見てしまっただけでは否定できない。
まだまだ世界は広がったようだ。

ごめんね、精神を疑って。あなたの性癖を疑って。

「じゃあ私が助けた犬はアベルってこと？」

「だからそう言っているだろう」

呆れた顔で言われて腹が立つ。

仕方ないでしょう！私の世界の常識に動物は人にならないっていう固定観念があるんだから。

生まれてこのかた、信じられないことを言われても理解できないし、しようとしなのが人間の性^{さが}ってやつだ。

夏希はおいおいと肩を竦めて壁に寄りかかり、格好いいポーズが決まったと思ったがあることにふと気付く。

「待って、じゃあ私の身体は？せっかく助けた私はどうなってんの！？」

「だから今からそれを説明するから落ち着け」

今にも掴みかかろうとする夏希の肩を押さえて自身の額に手をやる。わざとらしい仕草が似合っていてむかつく。

「全く、何でアベルはこんな娘を連れてきたんだか」

「ちょ、失礼でしょ」

また殴ろうとするが頭を押さえられ、前に進めない。

「ぬう」

「少しは落ち着け」

「山より深く海より高く落ち着いてます」

「逆だろっ」

冷静に返すフランスに苛立つ。くそっ、私は子供じゃないんだぞ。

自分よ、落ち着け、落ち着くんのだ。こんなところで騒いでちゃあ、子供と思われる。私は大人なんだ、大人はどんな時でも冷静に対処しなくてはならない。

だがそれはフランスの言葉により、ぼろぼろに碎ける。

「大丈夫だろう。お前の身体は今頃、病院に運ばれているはずだ」

「・・・は!？」

「外傷もなく、ただ寝ているだけだ。意識だけこちらに飛ばしたみたいだからな」

全く困った弟だ、苦悩が刻まれる顔は疲れているというのに美しさは壊れていない。だがそんな顔に見惚れることなく夏希は俯いて握りしめた拳を震わせる。

「ふ、ふざけんなあ!私を家に返せ!！」

せつかくトラックを避けて病院送り、もしくは死を避けたというのに何で工事中の穴に落ちて病院送りにされなければならない。

犬を助けたことにより轢かれたという武勇伝ならまだしも助けた犬に穴に落とされたなんて格好悪すぎる。末代までの恥だ、いや私が病院にいる間に助けた犬に恩を仇で返された女として間抜けな話が学校に広まってしまう。

そんなのは女の意地を持って止めなければならない。

「お礼なんていらなから返して」

「しかしなあ」

「私に不名誉を与えと言うのか」

「連れてきたアベルしか返せない。そのアベルが珍しくやる気を出しているんだ。後数ヶ月は諦めるんだな」

「数ヶ月！？この動物地獄に1日だって耐えられないと言うのに」

もう私の命はここで果てるのかもしれない、いや駄目だ。私にはハンドボールがあるんだ。
皆でトップを目指す約束したんだ。

こうなればその張本人に直談判をしようと部屋を飛び出した。

君にとど．．

長閑な風が吹き、雲がちょうど太陽を隠した中、2人の第一次言い争い大戦が勃発していた。両者とも大声で負けてはおりませんが、おっと何か動きがあつたもようです。

「帰らせて」

「嫌だ」

「帰らせろ」

「い、や」

何度も繰り返し返すが相手は折れてくれません。彼の心はまるで目の前に聳え立つ富士山です。私はまだ富士山の土も踏めていないようです。

「お礼なんていりません」

「俺が嫌なんだよ」

「助けた人がいって言うてるんですけど、旦那。もうそろそろ折れましようぜ」

「夏希が折れてよ」

「人の名前を軽々しく呼ぶな」

どうして知ってるんだと思ったがこの犬を助けた時に何人もの友達に呼ばれていたな、と思い出した。流石によく聞こえる耳ですと。

「人間、特に女の子って皆、動物が好きでしょ。それなのに夏希はさ、動物が嫌いなんて聞いてないよ」

「はっはっは、言っていないからな」

夏希は腰に手を当てて乾いた笑いを出しながらアベルを見据える。

確かに過半数以上の人間は動物に癒やされ、愛と一緒に生活していることだろう。しかし何事にも例外はある。

「夏希、本当に女の子？」

真っ平らに近い夏希の胸を無遠慮に触る。

「あれ、ちゃんとあつた」

「死ねっ！！」

なんて失礼な奴なんだ。人を勝手に連れて来たと思ったら女じゃないと？どれだけ人を馬鹿にすれば気がすむんだ。飼い犬に手を噛まれた気分とはこのことだ。

「明日の太陽が拝めないようにしてやろう」

ぼきぼきと指の関節を鳴らして臨戦態勢を整える。
いつでも来い、乙女の名誉をかけて戦ってやる。乙女の名誉はこんな野郎に負けるほど小さいものではないのだ。

「落ち着いて。俺は夏希を喜ばせたいんだから」

「帰してくれたら超喜ぶ、崇めたてる、毎日お礼言っから」

「俺がなんかしたいの」

「いらんわ」

話が平行線を辿る。この宇宙人とはちゃんとした会話ができない。

「・・・もう、いい。何でもいいから礼をして早く帰してよ」

「りょーかい」

結局、夏希の方が折れた。夏希は説得を諦めて早く帰らせるように頼むこととした。

願わくは、彼が直ぐに飽きてくれますように。

この想いは君に届くのだろうか。

子供じゃないもん

こちらの世界に来て2日目の朝、動物が描かれている壁と挨拶をして起きる。

そしてまた溜め息が出る。

なんでかまた枕が増えている。ベッドで寝る人物は1人なのになぜ枕が5つもある。シマウマにイルカにライオンにカエルに不細工な犬だ、もうやめてくれ……。

朝から憂鬱な気分で身体を起こし、着慣れた部活服であるジャージに着替える。

フランスが用意してくれた服はクローゼットにある、だがしかし、どれも乙女チックなんだ。ピンク色や白のどこのゴスロリって感じの服だ。

しかも動物柄の服がいっぱい混じっているのだ。

こんな物を着るくらいなら裸で過ごしたほうがまだ、いや冗談です。さすがに裸になって解放感を味わうのは早いです。自分の身体を見せて、悲鳴をあげる女性を見るのが楽しいという心境にはな

れません、なりたくありません。

「夏希、今日はどこに行く？」

朝食の席でアベルがかわつた果物を頼張る夏希に話しかける。夏希は果物を一生懸命呑みこんで、嫌な顔をする。

「引きこもつてたい」

「太陽の光を浴びないと健康的になれないよ」

「現代人の多くは家でゲームをしています、不健康バンザイです」

「えー、街を案内するからさ」

街か、確かに興味はある。香ばしい香りや見辺りのよい物がたくさんあるだろう、きっとアベルに頼めば買ってくれるだろう。

だが、外に出るということは、つまり、その、嫌いな動物に会うということでしょ。そんな命をかけて行くのならば、外的からの攻撃がない部屋でばーっと二ト生活を味わっていたい。

「大丈夫、街の人は人型で生活してるよ」

「でも元は動物だったわけでしょ、うーん」

確かに人と思えば普通に話せるし、触れるが何と言うのか。極端に動物が苦手な自分を直せそうにないのだ、頭ではわかっているが身体が拒否をする。

「見たこともないお菓子があるよ」

「・・・」

「甘いタルトにバターたっぷりのクッキー」

「・・・」

おいおい、お菓子で誘うなんて、夏だというのにコートで全身を覆ってマスクとグラサンをつけ荒い息をしている変なおジサマが初々しい小学校の女の子を自分の車に乗せようとする常套句じゃないか。

私が食べ物ごときで動物に会いにいくと言うのか。まったく、人を子供だと思ってもらっては困る。私はお菓子を餌にそんな怪しい車なんて乗らないからな。

「行かせていただきます」

おいおい、プリーズウェイト、白い眼で見ないでくれ。目のやり場に困る。

ああ、そうですよ。私は食い意地がはってますよーだ。人間、甘い物がないと生きていけないんだ。人間の身体の半分はお菓子でできているんだからな。

そうして私は食べ物を餌に城下へと行くこととなった。

子供じゃないもん（後書き）

たぶん虹乃も

お菓子でついて行く派です・・

赤い果物は林檎です

賑やかな人通りをアベルは悠々と歩いて行く。国王の弟なのに自分の顔を隠そうともせず、いつもの格好でいつものようにやる気なさげに歩く。

「おや、アベル様。今日は女の子連れてどこに行くんだい」

「ぶらぶら」

「じゃあ、これ持ってきてな」

身分の高い人なのに堂々と呼ばれていいんだろうか、国王の命を狙う人物に攫われたりしないのだろうか。

夏希が首を傾げていると恰幅の良いおばさんがアベルの名前を呼びながら夏希を見て、2人に屋台に並べていた物を投げた。投げられた物を反射的に夏希は掴む。見ると赤い林檎のような物だ。服でこすってそのままかぶりついた。

「がふっ」

なんと林檎のように甘い果物だと思っていたのに、すごくすっぱい。余りのすっぱさに顔を顰めて口を押さえて蹲った。そんな夏希を見てアベルは爆笑した。

「ちょっと、夏希。これ、知らないの」

「あ、当たり前でしょうが」

「ああ、そうだった。ごめんごめん」

笑われながら謝れても、懸命さが伝わらない。涙目になりながら睨むとアベルはようやく笑い過ぎによって出た涙を拭いて自分の林檎もどきを手で回す。

「これは、アシエルって言って紅茶の中に搾って入れるとすごく美味しいんだ」

そんなの、今から歩いて観光しますって人に渡さないで欲しい。人当たりの良いおばさんだったけど、つい恨んでしまう。

「いやあ、まさか歩き食いするなんて思わなかったよ」

ええ、ええ、すみませんね、マナーが悪くて。だって部活終わりはすぐくお腹が減るんだ、そんな時、近くにコンビニがあつて美味しそうな肉まんやアイスがあるなら学校帰りに食べるのが醍醐味つてやつだ。

「うっさいわ」

腹が立つて、アベルを置いて知らない街を歩いて行こうとするがアベルに腕を掴まれて手を握られる。

「離せ、こら」

「い、や。じゃあ、お姫様、行きますか」

背中が痒くなる台詞を吐いて、手を差し出す。その手の平に手を置くと手の甲に唇を落とされた。

「ふぎゃっ」

驚いて手を引っ込めようとするが、がしつと掴まれて所謂恋人つなぎをされた。指の間に入って来る細くて長い指は指の付け根を撫でるように繋ぐので、ぞくつとする。

そんな夏希にアベルはにやりと笑う。

くそう、格好いいからって何をしても許されると思うなよ。なんか負けた気がした夏希は部活で鍛えた腕力でアベルの手をぎゅっとする。

「いでっ」

ふん、からかう奴が悪い。ちなみに夏希な握力は男子顔負けの40キロ代である。

そんな夏希の手を握ったアベルは後悔して離そうとしたが夏希に手を力いっぱい掴まれているため外すことが出来なかった。

赤い果物は林檎です（後書き）

久しぶりの休み
外に出たくない（＾皿＾）／

牛の胃袋は4つ

夏希は満腹となつて、もう動くことが出来ない身体を柔らかな草の上に落とした。

食べ過ぎて気持ち悪くなるほどだ。こんなに食べたのは一昨日の夕ご飯のカレーぶりだ。つい最近じゃんって？だって、いつも満腹まで食べるんだもん。

「夏希の胃袋つて牛なみだね」

「うっさいわ」

「知ってた？牛の胃袋は4つもあつて牛の第1胃は、植物の繊維を分解する役割があるんだ。牛の第2胃には、エサを食道まで押し戻す役割があつて、牛の第3胃は、水と栄養物を吸収するとともに、大きなエサをより分けて第1、2胃へと反芻する機能もある。で、最後は牛の第4胃。そこでは胃液の分泌があつて、人間の消化器と同じ役割があるんだ」

アベルが説明をしてくれるのに私の頭の中は「牛のタンが食べた
い」でいっぱいだった。ごめん、女じゃなくて、意地汚くて。

「乙女の胃には甘い物は別腹っていうものがあるんです」

「・・・乙女？」

「うざいわっ！」

どこが乙女なの、という視線はもう見飽きた。というか今更、乙女かよってという視線が結構痛いぜ、びんびんくる。だがそんなことでは、へこたれないのが私だ。アベルの痛い視線なんて気にしないで、一休みして小腹が空いたらまた強請^{ねだ}るのが私さ。

もちろんお金はアベルが出してくれたので、いつも小遣いが食べ物に使われ、お菓子を我慢しなくてはならない夏希の財布事情とは違うから、つついっ食べてしまう。

「そんな食べなくても毎日連れてくるのに。今食べちゃうと楽しみ

が減るよ」

「何を言っているんだね、アベル君。今日は昨日とは違う」

「はい？」

芝居がかった夏希の科白にアベルは耳を疑う。こいつ、大丈夫かという視線つきで。

「そんな目で見るな。つまりはね、毎日というものは雲のようなんだよ。今日の雲はほら、人間みたいな形じゃん」

空に浮かぶ雲に向かって指をさす。その雲はまるで人間の横顔のような顔をしている。

「ほら、だんだんと形が崩れて来てる。この形に似たような物は明日にできるかもしれない、けど同じものじゃない。つまり、同じ物は二度とできないってことだよ。だから今日食べたお菓子も同じ製法、同じ味かもしれないけれど、明日になれば少し違つかもしれないってことさ」

だから毎日お菓子を食べているという訳じゃないぞ。ハンドボールはすごく動くんだ、お腹がすくんだ。だから、その分を何かで補給しないと倒れてしまうんだ。

「へー、結構頭はあるんだ」

「失礼なっ！確かに部活少女だが勉強はちゃんとしているぞ、そうしないと母にお菓子を没収されてしまうんだ」

以前に物理で赤点をとってしまった時といたら、身体ががたぶるだ。家中という家中のお菓子を隠され、お小遣いは貰えないから食べ物も買えず、しかも根回しをした母により友達も近所の人たちもお菓子を分けてくれなかった。

もう涙が出たね、禁断症状のせいで頭が狂うかと思ったくらいだ。それからきっちり勉強をしている。テストで良い点を取ると母が有名なケーキを買ってくれるのだ、あの味は神にしか出せない旨さだ。

いやあー、今となつてはいい思い出だ。遠い目をして、また形を変えた雲に目を移す。気持ちの良い風が夏希の前髪を撫でた。

ゆつたりな風と優しい日差しが当たるため夏希は瞼がだんだんと

落ちていく。

あまりの心地よさに白目になってしまった時だった。

「・・・ねえ、夏希は親に大切にされた？」

「そ、だね」

急にアベルが質問をするため寝ぼけたまま答えた。

「うちには弟がいるんだけどね、生意気で。うちの母は私と弟を大事に、大事にしてくれてるよ」

「そう・・・いいな」

アベルの呟きは風にさらわれて夏希の耳に届くことは無かった。

だって君は3位だもん

もう意識が夢の国に飛び立っている時だった。目の前に大きな苺のケーキが現れ、夏希が大きな口を開けて食べようとしたその瞬間、アベルの声が夏希を現実世界へと戻した。

「そろそろ行こうか」

「ふ、へ・・・うん分かった」

口から出そうになった涎を押さえて、ゆっくりと立ち上がった。くそう、あと少しだったのに。あんな大きいケーキは二度と目にかかれない美味しそうなケーキだったのにい。

ぐぬぬ、と悔しそうな顔をしている夏希を見て、どうせ食べ物のことだろうと思っているアベルには気付かなかった。

「たっだいま」

元氣良く、門番に挨拶をする。今の姿は大きなごつい顔の人型だが本来はゴリラだと聞いた。だが、人型ならきつと大丈夫、若干へつぴり腰になりながらも手を上げてアベルと一緒に門を通る。

ゴリちゃん（夏希命名）は軽く会釈をしただけだったが夏希はより一層手をぶんぶんと振る。

「・・・子供だねえ」

「高校生はまだ子供です」

びしつと親指をつきたてながら満面の笑みを見せる夏希に小さな声で呟く。

「いや、俺が言ってるのは精神レベルがあっ・・・!」

「ええ？何ですか？夏希ちゃんは可愛らしいって？ドウモアリガトウ」

最後の方が機械のように感情を込めずに言いながら、顎を押さえて蹲るアベルにっこり笑いかける。その右手は硬く結ばれており、甲が少し赤くなっていた。

「暴力反対」

「愛の鞭です」

夏希はアベルを置いて城の中へと戻って行った。その後ろ姿を見送るのはさらに愛の鞭を頭に受けて涙目になりながらも何故か喜々としているアベルと、それを遠い目をしてみているゴリちゃんだけだった。

だが夏希が自室に戻ろうと長い廊下を歩いている時だった。

メイド服を着たガゼルさんが大きな目をくりつとさせながら、とろけさせる笑みで夏希を出迎えながら顔に似合わない爆弾を落とす。

ちなみにガゼルとは鹿に似た動物だがウシ科で砂漠に住んでいる。

「国王が早く執務室にきやがれと言ってますよ」

「・・・ごめん、聞き取れなかった」

「国王が早く執務室にきやがれと言ってますよ」

「ごめん、もう一回」

「国王が早く執務室にきやがれと言ってますよ」

3度も同じ言葉を繰り返してもらったことに罪悪感を覚えるが、どうしてもその言葉が頭に入っていないのだから仕方がない。

「拒否は？」

「できません」

につこりと笑顔つきで胸がきゅんとする。思わず胸を両手で押さえてしまったが、じりじりと後ずさを始める。それに合わせてガ

ゼルさんも動く。

脱兎のごとく後ろを向いて走り出すがものの5秒で捕まってしまった。

そりゃそうさ、足の速い動物で第3位の記録保持者だもん。時速86Kmの動物にはどう足掻こうと勝てやしない。

後ろで手を押さえられながら、泣く泣く夏希はガゼルさんが執務室の扉を叩くのを涙ながらに見つめた。

だって君は3位だもん（後書き）

ガゼルという動物を見たことはないのですが
俊足という言葉に惹かれ、載せてみました^^

なにか

お薦めの動物がいたら教えてください

シマリスって可愛いものなのに

今、地獄の扉が重々しく開かれた。

「よく来たな」

「私は負けはしないぞ、魔王め。この正義の鉄槌を受けてみよ」

「・・・馬鹿か」

せっかく勇者になりきったというのに相手はのりが悪いです。

「馬鹿と天才は紙一重です」

「そうか、お前は馬鹿のほうへ傾いてしまったようだな」

「・・・酷い」

残念ながら自分が持っているだけの語彙力では強敵を倒すことができません。だれか私に天才児を味方に下さい。

「とまあ、前戯はこれまでにして。用は何でしょう」

首を傾げながら銀髪の国王、フランスを見つめる。何か怒られることをしただろうか？・うん、いっぱいした気がする。例えば変態と呼んだり、変態と罵ったり、変態と蔑んだりしたことだろうか。

だがフランスは夏希が予想していたこととは違ったことを言った。

「何故、私に黙って城下へ行った？」

「え？」

「黙って城下に行くなどと聞いていなかった」

「・・・」

何で自分の行動をいちいち赤の他人に言わねばならんだ。

しかも自分が行きたいと言ったのではない。

無理矢理、君の弟であるアベルに無理矢理連れていかれたのだ。

不可抗力だ、むしろ拉致だ。

最後の方は自分から進んで屋台で食べ物を強請りまくったのだが、それは棚に上げておく。

「アベルに文句は言つてよ」

「でも私に黙って行つたのだろう」

「だってアベルが言つてると思つたんだもん」

頬を膨らませて反論すると、フランシスがじつと見つめる。何故か潤んだ瞳で。

「お前は本当にシマリスに似ているな」

「黙れ！」

勢いよくつつこんでしまったが、よく考えるとシマリスというのは可愛いものではないか。

「しかも繁殖期中の」

「死ね！」

シマリスのメスは繁殖期になると頬を膨らませ鳴き声をあげるらしい。

繁殖期で、ちょっと待て。私は年中発情期のメスではないし妄想に生きているわけではない。

「何故だ、私は可愛らしいと思っているのだぞ」

「あんたの基準は一般人とは違うんじゃない」

夏希は手に持った袋を鍛えた剛腕で投げる。さすがハンドボール部の部長であると言っべきだろう、その袋はフランスの顎にヒツトした。

ただ袋の中に入っているものは柔らかいため、さほどダメージなどないが今まで人に物を投げられたことなど無かったフランスは精神的にダメージを受けた。

「この鹿め！」

悪口なのだろうか、分からない言葉を残して夏希は出て行った。

後に残されたフランスが袋の中を見るとフランスの好きな伝統料理、ファリイニがまだ温かさを残したままあった。

ファリイニは林檎を甘く似てパンに挟む食べ物だがフランスは昔からこれが大好きだった。

まさかこれを買ったのだろうか。

自分勝手な勘違いをしながらもフランスはファリイニを一切れかじった。

「・・・やっぱり旨いな」

悪いことをしたと思いながら食べるには気が引けたが、最近食べていなかったフアリイニを口いっぱい含んで変わらぬ味を楽しんだ。

燃え尽きたよ、真っ白にな

夏希は苛々のため、早く寝ることにした。何で私が怒られなきゃならないの、頭の中はそのことでいっぱいだった。

せめてもの反抗にベッドに置いてあった枕を全て投げて、そのまま枕なしで寝ることにした。

朝日を受けて自然と目を覚ます。

人間、どんなに苛々していても寝れるらしい。全く欲望に正直な身体である。

夏希はふかふかした枕を引き寄せて頬をすりつける。

「ふかふかしてるう」

肌触りが良すぎて語尾にハートをつけたいくらいだ。

しかも人の体温と同じように温かくて、それがまた眠気をさそう。

だがちよつと待て。確か私は枕を全て投げたはずだ。しかも枕が温かいわけではないし、手の平にのるようなこんなに小さいわけがない。

途端に冷や汗が背中を滑った。

「ま、まさか」

うつすらと目を開けてその正体を見ようとすると視界いっぱい白いものが広がる。

そのまま相手に気付かれないように離れようと、ゆっくりと後ろに下がる。

だが相手はそれに気付いたのか、離れる人肌を惜しむようにさらにくっついてこようとすする。

耐えることができずに飛び起きた。

相手も驚いて2人そろって一気に起きた。

夏希はベッド端によって相手が何かを確信した。

白く、もこもこした赤い目をしたジョージだ。そう、あの時、フランスから逃げようとした時に入った部屋にいったばいいた兎の中の一匹だ。しかもこいつは嫌がる夏希にすり寄ってきたジョージじゃないか。本当の名前は分からないがジョージで反応したからジョージだ。

ジョージは夏希が起きたのが嬉しいのか、ベッド端で震えている夏希に近寄る。

「すとあつぶ」

夏希が停止の合図を出すにもジョージは一步一步近寄る。

「止まれ、止まるんだ。そうしないと私は燃え尽きて真っ白になってしまう」

ジョージにかけて、あの有名なセリフを改良したがジョージ、君なら分かるだろう。

だが思いは虚しく、ジョージは思い切り飛び跳ねて夏希の胸にダイブした。

「ジョージイイイ！」

朝からの叫び声にフランスが扉を蹴り破ると、そこには兎に抱きつかれながら放心している夏希がいた。

ジョージはメイド頭の兎さんに抱きかかえられながら朝ご飯を涙目でちびちび食べている夏希を赤い目で忙しく追っていた。

「う、う、ジョージがまだ見てる」

兎さんに抑えられていなかったら絶対に夏希に飛びかかってきているだろう、ジョージの動きを見ながらパンをかじる。

「すみません、夏希様。ジョージは夏希様が大好きなようで」

「嘘だ」

「いえ、本当ですよ。ほら、今にも飛びかかっているでしょう」

「兎さん、絶対離さないで」

その途端にジョージは身体をだらりとさせ、長い耳をたらす。

「あらあら、拗ねてしまいましたわ」

私も拗ねたいよ。だがその心は誰にも聞こえない。

燃え尽きたよ、真っ白にな（後書き）

いや、それって明日のジョーじゃなかったか？
ジョージと似てるけど違うわー

ま、いつかw

嫉妬は怖いものです

そんな兎さんとジョージと一緒に話しながらご飯を食べていると、また勢いよく扉が開けられる。

デジャブだ、と思っていると見覚えのある男が夏希の部屋は自分のものだというように入ってきた。堂々すぎるだろ、という言葉は置いておくことにする。

「今日はどこに行こうか」

アベルが朝食中に入ってきて夏希の隣の椅子に凶々しく座る。そして夏希の皿から摘まんで自分の口に入れる。

「行かん」

「あ、城探検がいいの？」

「部屋から出ん」

「じゃあ、どこから行こうか」

「人の話を聞け」

駄目です、やはり宇宙人に言語は理解できない模様です。これじゃあコミュニケーションもとれずに人類は侵略されるしかありません。

いや、まだある。言葉が通じなくても伝えられる方法がある。

「俺の俺の俺の話を聞けーえ。二分だけでもいい。お前だけに本当のことを話すから」

「じゃあ行こうか」

沈没であります。誰だよ、音楽は万国共通って言った奴。音楽が通じない野郎がいるんですけど。

アベルが夏希の日に焼けた腕をとると猫のような鳴き声が聞こえた。

ジョージが兎さんの腕の中で耳をぴんと立てて足を動かしながら威嚇している。

「ああ、トイレに行きたいの？」

「夏希、酷いよ。彼は俺に嫉妬してんのに」

「Shit!？」

「・・・嫉妬ね」

「嫉妬って、あの昼にやっている女達が男を取りやって、あの手この手を使って相手を貶めようとする、あの嫉妬ですか」

「そこまでじゃないと思うけど」

「なんて恐ろしい子！」

夏希は手を口元にやり、昔の少女漫画みたいに白目にしたいとこ

るだが出来なかった。元々そんなに瞋は長く無いし、目の中に星も無いのだ。

なんて子なのかしら。こんな小さな身体に憎悪が詰まっているのね。そうして、相手をどんなふうに絶望へと突き落とすか考えているのね。

まさか、その小さな前足にはカミソリが。もしかしたら床に画鋏が落ちていて踏ませる気なのね。

「末恐ろしい子」

夏希はまた言つとジョージから距離を取つて、恐怖で震える。まるで恐ろしい物を見る夏希にジョージの耳が激しく垂れ下がる。

「相手ながら可哀想すぎる」

「いやいや、恐いのは裏工作しているジョージでしょ」

「・・・ジョージ？」

ジョージは誰だというように見るが一人、いや一匹しかない。夏希は兎さんに抱えられているジョージを指さして教えてあげる。君の濁った瞳にはジョージが見えないのかね、ほづら、心の目でみてごらんよ。

「名前つけたの？」

「ううん、ジョージって呼んだら反応したからジョージって名前か
と違ってただけだ」

「ああ、つけちゃったんだ」

え、いやね、宇宙人君。私は名前なんかつけてないって言うてる
のに君の耳はお飾りなのかな。犬のくせに耳が悪いって駄目でしょ。

嫉妬は怖いものです（後書き）

今、思ったが夏希って思いこみが激しい・

う、動けない

あちゃーと額を押さえているアベルに何だか腹がたって頭を殴ってしまった。何なんだ、私にも説明をしてくれないと分からないじゃないか。私だけ知らないなんて、のけものにされた気分なのだ。

「痛いよ、夏希」

「私の心も痛いのだ」

「どうせ棘の生えた心でしょ」

「聞こえない！ああー！」

子供のように耳を塞いで席を立って逃げ出した。

「ここどこ？」

アベルの制止を押しきって（殴って）逃走したのはいいものの、また迷ってしまった。

おかしいな、自分は方向音痴とは無縁のはずなのに。なんで、どこに行っても同じ壁だし、同じ扉しかないよ。

「ここはどこ？私は誰？」

悲劇のヒロインを気取って手で顔を覆って崩れ落ちて見せるが誰もいない。・・・さて、馬鹿なことなんてしてないで、誰か人を探そう。

きよろきよろと辺りを見回しているとピーピーとまるで息を吐くような声が聞こえる。けれど、どこから聞こえているか分からず、近くの扉を開けようとするが何か違う気がする。

「・・・いや、まさか」

そおつと下を見るとジョージが顔をあげながら「やあ、こんにちは」というように嬉しそうに見ているのだ。

そんな表情が分かってしまう自分が嫌だ。

「ジョージじゃないか。いいかい、ジョージ。私達の間で協定を結ばうじゃないか。私のテリトリーはここからここまで、この中か

ら入らないようにしよう」

夏希は腕を広げて自分の領域を主張する。それから人さし指を突き立てて、兎相手に本気で言う。端から見ると危ない人だが、ここは自分のいた世界ではない。多少のおかしさは目を瞑ってもらおう。

ジョージは分かってくれたのだろうか、小さく首を動かした。

「ジョージ、分かってくれたか！」

あまりの嬉しさに膝をつき両手を広げるが、もちろんカモンという意味ではない。ただのノリだ。

だがジョージはやはり動物だ。夏希の思いを汲み取ることができずジャンプして夏希に飛びついた。

「つつ、むー！」

小さくなっていたのが悪かったせいか、ジョージが勢いよく跳ねた先には夏希の顔があった。

ジョージのピンク色の鼻が夏希の唇にぶつかった。

しかも赤ちゃん兎というのに力が強く廊下に押し倒された。その

まま鼻を押し付けられたままなため、夏希は触ることもできず、悶えることしか出来なかった。

端から見ると、背中を廊下につけ腕を天に上げて、ぷるぷるしている。その姿は何だか、悪役が味方にでも裏切られて殺され、死にたくないと言っているような姿だったが、見ている人は誰一人いなかった。

ウミガメ（前書き）

食事の皆さまは

ご飯を終えてから見る方がいいかもしれない・・・

ウミガメ

呼吸も何もできずに夏希が真っ青になっていると、べりつとジョージが剥がされた。最後の方は抵抗して夏希にしがみついていたが剥がした相手を見て動きは止まった。

「大丈夫か？」

「・・・もう嫌だ。帰りたい。いや、土に還りたい。先立つ不孝をお許し下さい」

「ちょっと待て」

「止めるな、フランススよ。私は潔く土に埋まってくる」

まだ、ぶるぶるしている身体をなんとか立たせて外へと向かおうと歩み始める。

人生、まだ4分の1も過ごしていなかったけれど肉体はもう100歳を超えたかのように疲れたよ。ああ、一人で私と弟を育ててくれた母には感謝しきれないが先に天国で待つております。

そのまま本当に死にそうな夏希の腕を掴んで思考をこちらへと戻させる。

「死ぬな、まだ早いぞ」

「いいえ、私は生涯、動物と馴れ合いをしないと誓っておりましたがその約束を早々と破ってしまいました。これは死んでお詫びせねば償いきれませぬ」

「誰に誓ったんだ!？」

「近所の駄菓子屋さんの金色に光る招き猫にです」

「・・・戻ってこい」

頭をがつくんがつくん揺さぶられて夏希の脳みそが揺れる、揺れる、揺れまくる。

「う・・・すとつ・・・や、やめ・・・やめんかああ!!」

夏希は頭を揺さぶられた気持ち悪さから手加減なしにフランススの顎に拳をお見舞いしてしまった。何かいい音がした、そして呻き声も。

だが夏希も気分が悪く蹲る。今にも吐きたい、だが女の子は我慢だ、我慢。

女の子は授業中にトイレに行きたくても我慢するんだ。そうだ、これくらい我慢できる。

「だ、大丈夫か？」

自分も痛む顎を押さえながら、フランシスはジョージを片手に夏希の背中をさする。優しさにときめく瞬間だが、夏希は手を口に当て涙目で訴える。

「う、うつ・・おいえ、どこ？」

「おいえ？」

夏希は限界が迫っていた。

それなのに、その姿を見て悶えている奴が夏希の我慢を超えてしまっ

「・・おお、ウミガメが産卵時に見せる涙のようだ」

ちなみにウミガメが産卵時に泣いているように見えるのは体内に溜まった余分な塩分を排出しているために出るのだが、そこは置いておこ

「誰の子だ？」

「・・あ？」

「誰の子を産もうとしているんだ」

「・・・」

夏希の頭はすつと冷えて、殺人を犯すような目でフランスを見る。

そして自力で立ち上がり、近くの部屋を開けるがそこは何も置いていない場所だった。ならば、と次の扉を開けるがそこは衣装室だ。

「お、おい」

夏希の突然の行動についていけなかったフランスだが、次々と扉を開ける夏希を見てやっと不審に思う。

そして後をついて行くが夏希はフランスを見ようともしない。

そのため、フランスは夏希の顔をこちらに向かせた。

「何故、見ない？」

「うに・・・ヴメ」

「ヴメ？」

その瞬間、夏希はフランスの服に吐いていた。

せっかく我慢したのに、こいつのせいで乙女の品格が失われた。

窓とジョージ

まだ昼前というのにカーテンは閉められており、夏希はベッドで布団にくるまっていた。

「夏希様、お開け下さい」

メイドの兎さんの声が聞こえるが夏希は動きもしない。

「夏希様、フランス様も謝りたいと仰っております」

「・・・会いたくない」

扉越しに夏希のか細い声が聞こえた。通常では聞こえない声だが兎さんの耳は高性能だ。

「夏希様の好きなお菓子もございますよ」

「いない」

その言葉に兎さんは口元に手をやり、わなわなと震えだした。まるでこの世の終わりのような顔だ。

「な、夏希様が食べ物に釣られないなんて。そんなの夏希様ではありません」

その言葉を扉越しに聞く夏希。

確かにさっきまでだったからお菓子に釣られていただろう。
しかし今は食べたくない。

リバースしたばかりなのだ。

それになけなしの乙女心も傷ついたのだ。
本当にもう家に帰りたい、もうこんな国なんて嫌だ。

鬱々と人差し指でのの字をずっと書く。

カリカリ

へのへのもへじ、ののの、へのへの。

カリカリ

「ん？」

窓から微かな音が聞こえる。

むくりと身体を起こして薄暗い部屋を見渡す。

動物がモチーフのカーテンを開けた。

「ジョージ？」

窓のさっしにジョージがが立って前足で窓をカリカリしていた。

「・・・何人^{なんびと}たりとも、この私の心の壁を越えることを出来ない」

そう言つてカーテンを再び閉めるがカリカリと窓をかく音は止まない。

「・・・」

そう言えば、この部屋があるのは2階だったはずだ。それなのに、どうやってジョージは上ってきたのだろう。兎のジャンプ力、舐めんなよ。と言つても高がしれている。

もう一度そろりと覗いてみる。

「・・・なにっ」

ジョージは指の幅しかない窓の隙間に足をのせている。
やけに毛が揺れているな、と思っていたが風のせいだと思った。

「って・・・引き返せえ」

しかし、いくら訴えかけてもジョージはその場を離れようとしな
い。
命の危険もあるというのに。

「ジョージ、帰るんだ」

窓をかく音は途絶えない。

「・・・もしや入れて欲しいの？」

突如、音が止まった。
うん、これは窓をかくのが疲れたんだな。なんて思うわけない。

「ジョージ、私は落ち込んでいるんだ」

そんな時にジョージから逃げるといふ体力は使えない。
さらに落ち込んでしまう。

だが外の風が気になる。
ぐらぐらとジョージの小さな身体が揺れる。

「帰るんだよ、ジョージ」

だが全く帰ろうとしない。もしかしたら木には上ったが下りれなくなってしまった猫パターンか。

びゅうびゅうと吹く風が気になる、もしかしたら死んでしまうかも。

そう思うと自分の辛さなんて脇に置こう。

「ジョージ、入れるから待っててくれ」

窓を開けようとしたが問題が発生した。なんと窓が内開きではなく、外開きだ。

「・・・」

これは不味い。このまま開くとジョージは落下コースだ。

「ジョージ、タイミングを合わせよう。君と私なら出来るはずだ」

ジョージに真剣に語りかける。

「私が合図したら、ちょっと横に高く跳んでくれ。窓を開けたら直ぐに私が君をキャッチするから」

顔を縦に振ったジョージを見て、唾を飲みこむ。

「いち、にの、さん！」

勢いよく開けるとジョージが高く跳んだ。

そしてゆっくり落ちてくるジョージを両手でキャッチした。

「ぬああああ」

声にならない声を上げて、ゆっくりとジョージを下ろした。

春よ恋

ジョージを慎重に下ろすと直ぐにベッドに駆け上がって布団に丸まった。

「・・・」

ジョージはその場を動こうとせずになんとか寂しげにこちらを見ながら下がる。

風により乱れてしまった毛並みと寒さでだろうが、震えている。

「ジョージ、寒いん？」

こくりと怯えながら頷くジョージを見ると自分が悪代官のようだ。お主も悪よのう、と言いたいが相手はジョージだけだ。こんな冗談なんて分からないだろう。

「・・・おいでよ」

布団を広げて手招きする。

ジョージはびっくりしたように見るが恐る恐る近寄ってきてベッドにぴよんと跳ねた。しかし、それでも後数歩というところで止まった。

動物が苦手という夏希に遠慮してくれているのだろう。
小さいというのになんてできている子なんだ。

こんな子に気を使わせている自分が恥ずかしい。

「ごめんね、ジョージ」

やはり躊躇があつたが自分から手を伸ばしてジョージの頭に触れた。

「柔らかな」

手のひらで触れると、余りの小ささに驚く。

手の中のジョージは夏希が触るとびくりとしたが遠慮がちに触れる夏希の手に身体をこすり合わせる。

「う、あんま動かないでよ」

そう言うとジョージは言葉を理解しているらしく動きを止めた。

「こうしてると可愛いんだけどなあ」

動物は何を考えているか分からないため、どうすればいいかわからないのだ。

「ねえ、ジョージ。君は何を考えてるのかな」

答えなど返ってくるはずがないと分かっているのだが、話しかけてしまう。

「ねえ、動物が言っていることが分かれば少しは好きになれるんだけどなあ」

ねえ、というのが返事を期待しているわけではない。

だけと思うのだ。

動物の言っていることが分かれば少しは仲良くなれるのに。どうして鳴いているのか、どうして耳をぴんと張っているのか。

人間のように話せばいいのに。

「ジョージは夏希様が大好きだ、と言ってますよ」

「ふぎやあああああああー!!」

突然、耳に入ってきた声に大声を上げてしまった。

後ろを振り向くと、なんと顔に笑みを浮かべた兎さんではないか。

な、なぜここに。

そんな夏希の表情を読み取り、豊かな胸から金色の鍵を取り出した。

「魔法の鍵!!」

「・・・合い鍵ですわ」

なんでこうも、この国の人達はノリが悪いんだろう。

「ジョージは夏希様に一目惚れだそうですわ」

しかも驚きの余り、変なポーズをとっている夏希をスルーするという無視スキルが高い。

しかしスルーされたという事実は今は置いておこう。

「一目惚れ！？ 誰が誰に、何のために？」

「一目惚れに目的などあるのですか？」

「ないけどさ、君の瞳に本気で恋する2秒前^{まじ}」

「意味が分かりませんわ」

ごめん、兎さん。自分でも分からないから説明出来ない。

「つて、えー！！」

いやいや、いくら鈍いと友達に言われる私でもここまで言われれば分かった。

ジョージはアベルが好きなんだ。

だから私の邪魔をしてるんだ。あの時もアベルとくっつかないように私にわざとくっついて見張っていたんだな。

ジョージって雄だけどアベルが好きなんだ。でも諦めてはいけな
いよ。この国では分らないけれど他国では同性の結婚が認められ
るところがあるからね。

どうして、そうなるのか、夏希の思考は誰にも読めない。
うんうんと頷く夏希を見て、兎さんとジョージはやっと分かって
くれたかと目を輝かせる。

「私、応援してるよ！」

「・・・はい？」

どうして本人に好きと言っているのに応援などされなくてはいけ
ないのか。

彼女の頭の中を一回でいいから覗いてみたいものだ。

ジョージと兎さんは2人して赤い目を夏希に向けた。

春よ恋（後書き）

うふふ、おバカちゃん

絆は壊れない

それからジョージは朝から晩まで夏希に付き添うようになった。

最初は抵抗があつたものの、ジョージは夏希が嫌がることをしないで、しかも夏希の気持ちを汲み取るので、夏希はだんだんと触るようになった。

夏希が唯一触ることのできる動物のため撫でたりしたのだが、それにより更にジョージがくつつく。

朝、夏希が起きるとベッドに一緒にいてお早うのチューを鼻にする。

朝食の時は夏希の肩に器用に座って頬ずりをして甘える。そしてご飯を強請るため、夏希が野菜を与えていた。

昼は城をお散歩する夏希の後をくつつき、夜は一緒に寝る。

ジョージが人間だったならば確実に甘い恋人同士であつただろう。

実際、使用人達も噂していた。噂というよりも面と向かって本人達に言っていたが。

「まあ、夏希様とジョージは朝も昼も夜も一緒にいるんですね」

「はあ・・・」

「仲睦まじいですね」

「へえ・・・」

自分はそんなつもりはないのだが、そうだろうか。

生まれてこの方、動物と触れたことがなかったのだ。だから付き合い方が分からない。

実は駄目なのだろうか。でも兎は寂しいと死ぬ動物って言うし。うーむ、本人に聞いてみるのが一番だろうか。

「ジョージ、私達は離れた方がいいのだろうか」

それを聞くとジョージはピクリと止まり、なんとも瞳をつるつるさせて見上げるのだ。

「僕が嫌いになった？僕が嫌なの？」

そんな言葉が聞こえてくるようだ。

うつ、自分が血も涙も無い悪役になった気分だ。

そして、ひしと夏希の服を引っ張る。

「ごめんよ、ジョージ。もう二度とそんなことは言わない」

ぎゅっとしがみついて離さないで絆を確かめ合う。

僕達の絆は誰にも離すことができない永遠のものとなるんだ。

「・・・何してんの？」

そんな2人に無粋な奴が。

だが私達の絆はそんな奴には負けない。

「おい、夏希。聞いてるう？」

それでも離れない2人を見かねて空気が読めない男が切り裂いた。ジョージを夏希から取り上げた。

「フーッ!!」

ジョージが威嚇の声を上げるが本人は素知らぬ顔。

そのままポイとまるでそこにあったゴミを捨てるようにジョージを放った。

「ちょ、危なっ」

そんな夏希の心配は余所にジョージはくるりと降り立つ。
運動神経は抜群だ。体操選手としてオリンピックで金メダルがとれそうだ。

「おおー」

「君さあ、たかが生まれたての子兔が俺に立てつく気？」

ジョージの俊敏な動きに感嘆する夏希に対し、アベルは冷ややかな声でジョージに話す。

「しかも夏希は君のこと何とも思っていないからさ」

「ちょ、アベル。そんな言い方しなくても」

いくら好きな人でもそんなことを言われるのは辛いだろう。

未だにジョージがアベルを好きだと勘違いしている夏希は不安気に2人を見る。

「君さあ、いくら俺の夏希の婚約者だからって調子乗らないでくれるかな」

「は？誰が誰の婚約者だって？つうか、私はお前のものでないわ！」

いつ夏希は婚約者になったのか、全く覚えがない。

それなのに本人が知らぬ間に秘密文章でも提出されていたのだろうか。

そして日本は秘密裏の中、他国から攻撃されるのね、じゃなくて今は自分の話だ。

火花散る

夏希は向かい合って火花を散らしている2人を交互に見るがどちらも動かない。

長く思われる時間が過ぎた（実際は10秒もなかった）がアベルが動いた。

アベルは夏希の後ろに立って年中部活で動きまわっているために無駄な肉がない夏希の腹へと手を回して寄せる。

「ごおら、どこに触ってんじゃ」

顔面に拳を沈めようとするが両腕も一緒に抱えられているため、動けない。以外に力があるアベルに感心するが、それは違う人によつてくれ。

「ほら、やっぱり分かってなかったでしょう」

「何が」

「相手に名前を贈ることは結婚を表すってこと」

「・・・はい？」

「だから普通は男から女性に名を贈るんだけど夏希はその兎に『ジョーじ』って名前を贈ったでしょ。だから夏希は私と結婚して下さって意味。本当は両方が大人の時にするから、まだ子供な兎とは婚約って関係」

夏希は何も言えず、開いた口が塞がらないとは正にこのことだ。

夏希が唯一思った言葉とは「異文化コミュニケーションは難しい」だった。

「・・・いや、でも私さ、地球に戻るし。そもそも動物とは結婚できないしさあ」

ジョーじには悪いが誰が動物と結婚するのだろう。確かに動物と結婚してもいいと言う人はいるかもしれないが夏希は違う。

だが振り返った夏希を待っていたのは大きな瞳から流れる涙。ぽたり、と落ちた涙は床に小さな染みをつくる。

「ジョージが泣いてる!？」

どうしよう、こんないたいけな子供を泣かせるなんて自分はなんて最悪な人間だ。生まれ変わった方がいいかもしれない。

「う・・心が痛い」

「大丈夫大丈夫、あんなの嘔泣きだから」

心の無い奴が悪魔の囁きを耳元ですが私は悪には屈しない。

こんな綺麗な涙を流す子供がいるか、いやいらない。って、それだと否定してるよ。

自分に突っ込んで、もう一度ジョージを見る。

「うむ、まるで真珠のような涙じゃ」

「夏希って詩人？」

「うん、今、目覚めた」

茶々を入れてくるアベルはさておき、夏希はジョージを抱き上げて視線を合わせる。

「多分、歳が違うよね」

「そうだね、ジョージはだいたい人間で言うところの9歳位かな」

やべえ、自分、こんな子に手を出したら犯罪じゃん。9歳という

と小学生、夏希とは7歳もの年齢が離れている。

うわあ、友達がいたら「夏希のロリコン」って言われてたな。遠い目をして回想するが、うるるとしているジョージの瞳を見て現代へと戻る。

「おっと、そうだね。多分ジョージが大人になってる頃には私はおばさんになってるんだよ。それに色々な出会いがこれから先、ジョージには待ってるよ」

あの時に間違って入ってしまったベイビー兎の部屋を思い出す。
あんなにいたのならジョージは選り放題だ。
きつとハーレム状態だね。

だけどジョージはふるふると顔を振る。しかし、言葉が通じない
夏希には何を否定しているか分からないのだ。

アベルは分かっているのだろうか、顔を向けるが意地悪くあからさまに顔を背けた。

「うおーい、その顔は分かっているだろう。いいから教えんか」

「ええ、やだ。だつて言っちゃうとさ、つまんないじゃん」

大の男が「じゃん」なんて言っても可愛さの欠片もない。むしろキモイに相当する。

「では、私が」

「うわっ！」

なんと兎さんメイドが真後ろに立っていたではないか。何でこの屋敷の人達は人を驚かせるのが好きなんだ。

そう思っている夏希の腕からジョージを受け取って、代弁してくれた。

満月の夜

口がきけない、というか夏希には伝わらないジョージが言わんとしていることを兎さんが語り出した。

「夏希様が言った年の差なんて関係ない。それにもうすぐで大人になるって言ってますわ」

「いやいや、大人ってまだ先でしょ」

「いえ、ここでの大人とは人型になれるかです」

「人型？」

ぼわわーんと頭の中でフランスのことを思い出した。鹿から人間・・・のおおおお！！は、はだ、はだだだだ、奴は裸・・・いらんことを思い出した。

「ごほんと咳払いして夏希は赤くなった頬を押さえた。

つまり、小さい時は動物そのままの姿だが大人、つまり人間の姿になれると大人として認められるそうだ。

「大人って直ぐになれるんだ」

「それぞれですが、だいたい15位でしょうか」

「じゃあ後6年かかるよね？」

「ジョージは直ぐに大人になれそうですわ」

「なんで？」

「愛の力ですわ」

ぽくぽく、ちーん。

なるほど、ジョージはアベルに恋してるから早く大人になりたいんだ。

ん・・？となると訳も分からず勝手に婚約などしてしまった夏希は邪魔者でしかないのではないか。

なんて空気が読めない奴なんだ、自分。

申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

しゅんとしてアベルとジョージを見る。

「2人とも、ごめんね。邪魔者は消えるから」

「は？」

ジョージもアベルも分かっている様子で首を傾げる。
ほら、息がぴったりだ。

「だから、ごめんって。愛し合う2人を切り裂いていたなんて私って、なんて空気が読めてなかったんだろっね。生まれてきてごめんなさい」

「・・・いや、今の方が空気を読めてないよ。どういうこと？」

「え、私の口からわざわざ言わせたいのですか」

「・・・夏希の思考は俺達には理解できないほど常人とは異なってるからね」

もしや、褒められている。ときどきしながらアベルを見るが、アベルはまるで先生が物覚えが悪い生徒を見守るような生温かい目で見ていた。

「・・・その目って馬鹿にしてる？」

「いや、夏希の頭を一回見てみたいって思ってるだけ。で、何だっ
て。俺とそこの子兔が愛し合ってるって、その口は言ってるのかな
？」

夏希の小さく、水水しい唇を見つめながらアベルは微笑みながら

言う。夏希はアベルの目しか見ていなかったため、彼の口元が全くといっていいほど笑っていなかったのを見ていなかった。

真一文字に唇がきゅっと結ばれているのを夏希は勝手に脳内で繰り広げられていた妄想により見逃してしまったのだ。

「だって、満月が出ている夜、ちょうど厚い雲が明るい満月を隠した時に2人は噴水のある場所で密会を重ね、ジョージが『まだ子供だけど、そしてアベルは王族だけど側にいることを許してもらえますか』って言って、そんなジョージにアベルが『馬鹿だな、王族なんて関係ない。大事なのは今、この瞬間だ』って、そんなこと言う唇は塞いで・・・」

「このお頭^{こむ}には何が入っているのかな」

がっとな夏希の頭蓋骨を鷲掴みにして夏希の頭を揺らす。

あわわと前後左右に揺れる身体をなんとか保たせながらも夏希は横目でジョージと兎さんを見る。

そこには完全に固まったジョージと肩で笑っているが表情には出していない兎さんの姿がそこにあった。

残念な頭

ぐわしぐわしと頭を揺さぶられ、脳が揺らされて気分が悪くなつていく。

またリバーズするのはどうしても避けたいお年頃だ。

「や、やめてえ。お代官様、頭がぐるぐるしてます。世界が回つてますう」

「一度、夏希の脳みそを壊して新たな脳を埋めつきたい気分だよ」

何か不穏なことを言いながら、アベルは手を離してくれた。

だが、がっとな肩を掴んで夏希の身長に合わせて自分も屈んで、視線を合わせる。

「ち、近いのですが」

「これくらいの距離で言わないと夏希の頭は理解してくれないと思うからね」

拳一つしか入らない距離でアベルが話すものだから、アベルの息が夏希の睫を揺らす。

おおう、これはラブラブなカップルがすべきことであって赤の他人がすることではない。

「いや、あのですね。一般ピーポーはそんなことはしないのですが・」

「・・あのね、俺とその子兎は言わばライバルみたいなものなの。いい？絶対に恋人同士じゃないし、そんな妄想もするな」

え、私の抗議はシカッティングですか。
というか目が恐ろしいです、がたぶるです、全身が痙攣を起こします。

「え、沈む太陽を水平線越しに眺めながら浜辺で追いかけてこするのではないのですか。『待てよ、ジョージ』、逃げるジョージをアベルが追いかけて、『ここまでおいで』ってジョージが・ふがつ」
「いい？次言ったら、この口、本気で塞ぐから」

こくこくとまるで首振り人形のように頷いて、もうそんな妄想はしないと誓った。

これは本気だ。次に何か言ったら本気で塞がれそうだ。
脳内に針と糸が浮かぶ。

上唇と下唇が一生「こんにちわ」しないように黙った。
だが頭の中ではジョージが女役でアベルが男役で変換されている。
しかし、このことは口に出さない方が宜しいようだ。

ぶつたれながら、静かにしているとアベルが手を唇から離して頭を撫でた。なんか子供にやる仕草にむすつとしながらも傍観してい

る兎さんとジョージを見た。

「・・・視線が痛いのですが」

「いえいえ、微笑ましい光景だと思ひまして」

「いい子だな、夏希は。ほうら、よしよし」

「離さんかい！」

拳を振り上げると、ようやく頭を撫でる行為をやめたのだが、手は頭にのせられたままだ。

「私、高校生なんだけど」

「はいはい」

「テストで毎回10位には入るんだぞ」

「はいはい」

「ハンドボール部のキャプテンなんだぞ」

「はいはい」

いくら言っても離そうとしないアベルの足に蹴りを入れるがかわされた。

ぐぬぬ、なんか自分が小さく見えてしまう。

「あらあら、ジョージが妬いていますわよ」

兎さんの声に抱えられたジョージを見るが別段変った様子は無い。変わったといえば、今にもこちらに飛びかかりそうで髭をぴくぴくと震わせているだけだ。

「・・・普通じゃない？」

「夏希の目は腐っているんじゃないかな」

「はい！？視力、両方とも1・5ですけど」

友達はコンタクトやら眼鏡などしているが、夏希は裸眼で過ごしている。生まれてこの方、目に困ったことはない。

「ごめん、夏希と話していると疲れる」

呆れたような声に兎さんが同感しているのが見えた。

天使様

本当に疲れたような声を出すので夏希の脳裏には会社帰りの親父が浮かんだ。草臥れたスーツに身を包みながら電車に揺れて家に帰ると子供も奥さんも先に寝ている、という図だ。

「疲れるですと。な、なんとまあ、ご愁傷様です」

「夏希のことなんだけどね」

その時、まるで雷が全身を走ったような衝撃を受けた。

そのまま、ゆっくりと膝について倒れるが誰も起こしてくれない。

「あわわわ、私というと疲れるですとな」

「うん」

更なる打撃を受けて夏希は膝を抱えて座った。

そして床にへのへのもへじを書きだす。

「私といると疲れるんだってえ。なら早く戻せよなあ。早く戻ってハンドボールがしたいなあ」

ねえ床さん、と床に話しかける夏希を見て兎さんとアベルはひいた。

しかし見捨てなかったのはジョージ。さすが夏希の許嫁である。兎さんの腕から抜け出し、静かに夏希の側に寄って夏希を見上げる。それに気づいた夏希はジョージを抱きしめた。

「ジョージ、君だけだよ。ありのままの私を受け入れてくれたのは」

あまりの嬉しさにジョージの首元にキスをしてしまった。その途端にジョージが淡く光って夏希の両手に重みが増してジョージを持っていられなくなった。

びっくりした衝撃で瞳が閉じる。

だが何か生暖かいものがくっついていてのを感じ取って目をあけ

ると、そこに天使がいた。

「ほう えええええ！？」

金髪の美少年は赤い目を嬉しそうに輝かせながらも色白の腕を夏希の首に回した。

「え、ええええええ！？」

頭がついていけずに悲鳴を上げる。

しかも、ちらりと下を見るとこの少年は裸だ。首元に絡みつく腕はすべすべしていて肌触りが心地よい。

「会いたかった、夏希」

「はうわ！なななな、なんて完璧な美や」

見た目にして小学生程の少年はまるで地上に降り立った天使、いや女神様や。少年という年頃でありながら、すっとした鼻筋や甘いマスク、まだ肉という肉すらない少年を見ると将来が楽しみだ。だが待て、君は誰だ。こんな美少年なんて見たことないぞ。

あわわとアベルと兎さんを見るが2人も突然現れた少年に驚きが隠せないようだ。

「夏希、夏希、夏希」

何だか少年だというのにこんな色っぽい声を出せるなんて、できる。この子できるよ。

「え、えと、どちら様でしょうか？」

途端に天使の瞳が曇る。

「ああ、ごめんねごめん。お姉さんが悪かったね」

こんな美少年を泣かせるなんて年下好きの友達が見ていたら殺されていたところだ。

「夏希、僕のこと分からないの？」

「い、いや覚えてますとも。ほら、あれでしょ、あれ。えとこの間、会ったっけ？」

苦し紛れに言うと少年はついに泣き出してしまった。はわわ、綺麗な瞳に涙が。

「ごめんね、お姉さんが悪かったよね。だから泣き止んで」

「やだ」

「ふえええん。お姉さんも泣きたいよ」

「じゃあ、チュウして」

「ふえ？」

「チュウしてくれたら泣き止む」

涙目ながらの願いは夏希のハートを貫いた。まさしくキューピットの矢がズキョンと夏希の心臓を貫決り取ったようだ。

「鼻血が、ぐはあ」

鼻を押さえながらきめ細やかな頬に近づこうとした時、夏希の頭が掴まれて少年と離された。

思春期な君

ぐざつと首の骨が鳴った。

苦痛に顔を歪めさせながら張本人を見上げると天使君と睨み合っている。

微かな舌打ちが天使の口から聞こえた気がするが気のせいだろう。

「いきなり何すつとよ！！私の首が良き音したとよ」

だが夏希の頭を掴んだまま離さないアベルは聞いていない。

「・・・おい、アベルさぁん」

だが何の反応もせずに頭も離さない。

何がしたいねん、突っ込みたいがまた反応してくれないのだろう。

ちらりと兎さんを見るも兎さんは先程より笑みを深めて見守っているだけだ。

仕方がないので見知らぬ天使君を見る。

「えと、天使君・・・？」

「天使って僕のこと、夏希？」

こくりと頷いて申し訳なさそうに質問する。

「えと、私の知り合い？」

「本当に分からない？僕だよ僕、ジョージ。夏希が名前をつけてくれたじゃない」

・・・今日のご飯は何だっけ？

あ、厨房の象さんがパリエって言ってたな。お腹すいたなあ。

「おい夏希。現実逃避しないで」

目の前で手を振り振りとされて、はっとした。
おっと大分トリップしてたらしい。

「なーっーき」

ちゅっと夏希の鼻に柔らかいものが触れた。

「な、この兎が」

「ジョージだって。夏希がつけてくれたんだから」

ふふんと偉そうとしている自称ジョージがアベルに目を向ける。
何だかこの自称ジョージは外見は天使であるのに、なかなか好戦的だ。

「ぐっ、痛い痛い」

苛立ったアベルが力を入れるので夏希の頭蓋骨が悲鳴を上げている。

・誰かこのエンドレスな会話を終わらせて。

「そこまでですわ、アベル様、ジョージ」

やっと兎さんが夏希の必死のSOSを汲み取ってくれて、手を叩いて2人の注意をこちらに向かせる。

「アベル様、夏希様の首が大変なことになっていますわ。ジョージも大人になれたからと言って、調子にのらないの」

2人は、ふんと鼻をならして互いにそっぽを向いた。

その仕草は同じだったので本当は仲が良いのではないかと夏希は痛む首をさすりながら思った。

「というか、ジョージって、あの白い兎さんのジョージ？」

「うん、そのジョージ」

嬉しそうに笑っているが、如何せん彼は裸ナウだ。
直視できない。

これでも一応JKなんです。小学生の裸を見て興奮する子ではないがこれだけの美少年だ。自分がいつロリコンの道に進むかもわからない。

夏希は部活により汚れた自分のジャージの上着を脱いでかけてあげた。

途端にジョージの目が輝く。

赤い目がきらきら、まるで本物のルビーのようだ。

「夏希、大好きっ！」

「ぐぼっ・・・!!」

小さな身体には似合わない程の力で飛び込まれたために、よろけて床に尻もちをついた。

ぬうつう、子供の力を侮ってはいけないとは、このことだな。

「好き、好き、好き、大好き」

「あ、ありがとう・・・？」

なぜか大胆な告白をされてしまった。

しかも、すぐく身体を押しあてられ、もう全身で喜びを表現してくれている。

「もう、ずつと言いたかったのに夏希ってば分かってくれないんだ

もん」

ぷくつと頬を膨らませて睨む姿に萌え・・・おおっと、まだそんな次元にはいかないぞ。

「えと、ごめん・・・ね？」

「もう鈍いんだから、夏希が寝てる時とか僕が何回もちゅーしたり、夏希と一緒に風呂入ってる時に何回も夏希の身体にちゅーしたのに。というか、夏希の胸元にある黒子って色っぽいよね」

「・・・ジョージ？」

「うん？だから、そうだって」

「・・・ジョージー!!」

なんてこった、一緒にお風呂に入ったことがあるのはこの世界でジョージだけだ。しかも胸に黒子があると。がばつと学校指定の体操服の服の中を見る。

「そうそう、左胸に2つある黒子」

「のおおおお!!」

自分でも気にかけたことなどなかったが、本当だ。確かに黒子が見えた。

そんな、天使だと思っていた子はまさかの思春期でした。

思春期な君（後書き）

まさかの、むっつり

弟と青年期

とりあえず色とりどりの花が咲いている庭園に移動した。

兎さんが紅茶を淹れてくれている傍ら、夏希はクッキーを食べようと左手を伸ばす。

利き手である右腕は天使もとい思春期ジョージによって、がちに掴まれている。

しかも真っ白な肌をしている2本の腕で、頭を夏希の肩に乗せながら。

「ジョージは食べないの？」

「夏希が食べさせて」

うつるとした赤い瞳とふわつとした柔らかい金髪が夏希の頬をくすぐくすぐるといふ最強のコンボにノックアウトされる。

「ふみゃー、か、かわ、かわいいー」

ぐりぐりと頭を押し付けてクッキーを小さな口元に持つていく。パクリと食いつくジョージの口は小さすぎてクッキーが全部入らなかった。

「あうう、こんな弟が欲しかったよお」

夏希の弟は中学生、只今反抗期真っ盛りなのだ。
お姉ちゃんは、こうやって仲良く手を繋ぎながら一緒にご飯食べたいんだぞ。

まあ、たまに見せるデレがいいんですが。

「ご飯だよー」

「夏希、まだ喰うのかよ。部活帰りにいっぱい喰ったのに」

「え、あれは別腹だって」

「肉まんとアイスとフランクフルトとパンにピザが？」

「うん」

「夏希ってどんな胃してんだ」

というデレ。

え、どこにデレがあつたかつて。

確かに口は悪く、夏希を姉だと思っていない行動だが弟は呆れながらも夏希の頭に手を置いて一緒にリビングに行くのだ。その手の優しさは、間違いなく弟の照れ隠しだと自負している。

まあ厨二病よりましだ。

ハンドボールの友達の中学生の弟は厨二病らしい。

まずコーヒーはブラックという虚栄に始まり、学校に行く時は眼帯と包帯を腕に巻いていく。

眼帯・まあ、分からなくもないが、なぜ包帯と思ったが、それを聞いて納得というか啞然とした。

「皆、離れる。俺の腕が勝手に・・・」と腕を抑えながら叫ぶらしい。

うん、良かった、普通の弟で。

まあ、反抗期でも厨二病じゃなきゃいいか。

そう思い出していると袖をくいくいと引っ張られた。
振り向くとドアップのジョージの顔だ。

「ん？どうかした、ジョージ」

首を傾げると更にジョージの顔が近づき、睫が長いと思っていると柔らかいものが唇にふにと触れた。

「え？」

「もう、僕、弟じゃないって」

ぶん、と顔を膨らませているがそんな顔に騙されない。

今、確実にジョージの可愛い唇が触れましたよ、触れました。

勘違いしていました。ジョージは思春期ではありませんでした。青年期でした。

近親・・・おつとこの先は言えねえぜ

「油断も隙もねえ」

くいつと腰をかつさらわれジョージと引き離された。

「俺の夏希なんだけど」

「いやいや、おかしいだろ」

「俺が連れてきたんだけど」

「連れてこられた、だけど」

腰に回された手をひねって呆れ顔で見る。

快く連れて来られた訳ではない。無理矢理、だ。もしかしたら車に轢かれてしまっただけかもしれないのを助けたのに落とされて、こんなところに連れて来られるし。

「むしろ俺の婚約者でしょ」

「いやいや、突発的すぎだから」

夏希は手を振ってうんざりとする。いい加減、自分の主張も聞いて欲しいものだ。

「てか何でそんなに冷静なの。キスされたんだよ」

「え？ 挨拶じゃん」

「・・・」

啞然とするアベルと兎さん。

夏希はその理由が分からずに大きな目をぱちくりとする。

だって外国はキスするものだし、友達とくっついったりするし一緒に物を食べたり、ペットボトルを回し飲みする。

だからキスとか、ぶっちゃけ平気じゃね、という夏希の持論がある。むしろキスで騒いでいたら女優さんや俳優さんは大変だ。一回キスされる事に「私の純潔があ」と騒ぎ立てることになるのだ。

というか今のキスはバードではないか。ちゅっとして離れていくなんて可愛いものだ。

だから平気だ、むしろカモン。

夏希の許せる範囲は人より広がったこともあり、またジョージを弟と捉えていることもあり嘆いたりしなかった。

しかも、私は知っているのだ。成績優秀な夏希をなめるなよ。得意げなポーズを決めて、更に斜め45度という角度からアベルを見る。

「ふぎやっ」

ふふんとしてると鼻を摘まれた。
う、う、可愛いお鼻が。

「何、その顔」

「はっはっは、アベル君よ。僕は全てお見通しさ」

腕を組んでエアーパープを加えて口から空気を出す。

「はい？」

「僕の優秀な頭にかかれば難解な問題も一発さ。君には婚約者がいるだろう」

「は？」

「君は先程言った。名前を捧げることで結婚を意味すると。つまり君、アベルという名がある君には婚約者がいるのだ。婚約者がいる身でありながらの愛の語らいは倫理に反すると思わんかね」

「違います」

「そう、違っ……ええー!!」

ずっと側で控えていた兎さんの静かな声に夏希は叫んだ。

「なな、何でっ!？」

何故だ、完璧な推理だった筈だ。

「いえ、アベル様は王族ですから。王族の方は王直々に名を賜るのです」

「え、近親・・・ふがつ」

「口塞ぐぞ」

ドスの利いた声に確実に天に召されるのを覚悟した。

ああ、写真でしか見たことがないお婆ちゃんが目に浮かぶ。今、行くね。

「いい、王族は先に名前を貰うの。婚約者云々の前に」

「い、今聞きましたが」

「この小さな脳に入らないと思って繰り返してあげているんだよ」

「寛大な処置、有り難く存じます」

丁寧な口調の裏側に威圧を感じ、こちらも丁寧に答えてしまった。

結婚とは

はうう、怖かったよお。

怖すぎて思わずアベルから逃げ出してジョージにすがりついた。
自分より年下であるのに。お姉さん失格である。

「あうう、ジョージ」

よしよしと頭を撫でられながら落ち着いた。

とりあえず頭の中を整理する。

まず、この国は私がいた世界とは違う国、動物の王国である。
そして国王のフランスが統治していて、元は動物であったが人間に変わるらしい。それは大人になった証であること。

また名前がついている人は結婚している、ただし王族は別。

「これで如何でしょう」

「うん、夏希は偉いねえ」

「えへへ」

可愛い子に褒められる、なんて素晴らしい響きでございましょうか。

「それで夏希は僕と結婚するんだよね」

「・・・はい？」

「良かった、『はい』って言うてくれて」

いや、これは肯定ではなくて疑問の『はい』です。

「夏希は俺と結婚だよな」

いや、アベルと結婚するとか言うてないし。

「あら夏希様はモテモテですわね」

いや、動物にモテても。茶化さないで下さい、兎さん。あ、兎さんってことは、まだ結婚してないんだ。こんな綺麗なのに、男達は何をしてるんだか。こうなれば、私が。

「兎さん、結婚して下さい」

「まあ」

「夏希、僕はどうなるの!？」

ジョージがしがみついて秘技、上目遣いを行使している。

「あつ、こ、これが男が落ちるテクか」

やばい、これは好きじゃない女の子がやっても男の胸はときめくよ。現に夏希の鼓動は早くなっている。いや、これは腰にしがみついているジョージがぎゅうぎゅうと締め付けるから別の意味でドキドキしているんだ。

「夏希が僕に結婚しようって言ったよね」

「ぐ、それは知らな・・・」

「知らなかったでは警察は通りませんわ」

いや、兎さん。この国に警察なんているのですか。なんか子犬が帽子被って嫌々ながら身の丈に合わない服を着ている姿が浮かぶ。

「夏希は僕なのでしょう」

だ、誰か、誰でもいいから何とかしてくれ。

パンツ

夏希の思いが届いたのだろうか、乾いた音が空を切った。

誰かが手を叩いたようだ。

それだけなのに兎さんとジョージがずっと立ち上がって頭を垂れた。

「お前達、それくらいにしておけ」

「フ、フランス」

「・・・フランスだ」

救世主現る、果たして夏希はどうなるのか、次回をご期待ください。

「この阿呆め」

「はうう、罵られてるよお。これを快感ととるべきか、いやまだ健全でいたい」

はい、腐った奴みたいな目で見られました。

心の汗

まるで生ゴミに対するように夏希のジャージの襟を掴んで2人から引き離れた。

「アベル、これを連れて来たのは恩返しのためだろう。ならば、さつさと満足させるがいい。ジョージ、これはこの国のしきたりを知らない。なれば、そのように強制することはできない。だから、これに選ばせてあげよう。アベルがこれを連れ回す間は」

おいおい、何回私をこれ呼ばわりすれば気が済むんだ。私は物ではない、人間だ。人権のために私は戦ってやる。

「待て、フランス。私は・・・」

「早くこの愚鈍を連れてけ」

「・・・つつ!？」

うどん、いや、愚鈍だと。な、なんて野郎だ。

夏希は高校生、しかも義務教育という、ゆとり世代に生きていた夏希は初めて人に嘲りを受けたため顔が真っ赤になった。

何で、何で知りもしらない赤の他人に言われなきゃならないの。だって今まで先生にも友達にもそんなこと言われたことがない。皆、夏希のことを好きだって言ってくれて、ふざけあって、笑って。

「・・・っ、う・・・え」

急に胸が苦しくなって下を向いた。

どくどくと胸が鳴って身体から突き破りそうなほど痛い。視界もぼやけて床が見えなくなった。

夏希が細かく震えていることに気付いたのか、フランシスは片眉を上げて下を向いている夏希に声をかける。

「おい」

「・・・」

それでも反応しない夏希の顔を無理矢理上げさせるとフランシスは目を見開いた。

「あ、その」

「う、う。違うもん、違うもん。こ、心の汗が出て、きた、だけだも、ん」

そう言つと、しゃくり上げて泣き出した。

「あ、汗が。出てきたんだもん、ふえ、ふみい」

「まだ言うか」

フランスは若干の罪悪感を感じ懐から金糸で縫われたハンカチを差し出した。

しかし夏希はそれを借りることなく、自分のジャージの袖で乱暴に拭くとフランスを赤い目で睨んだ。

「何だよ、私だって早く帰りたいのに。それなのにあんたの弟が帰してくれないじゃん。自分の弟を甘やかし過ぎなんだよ。過保護なママが。私だって母も弟もいるのに。眠り続けてる私を心配してるのに。それなのに帰してくれないじゃん。動物が苦手って言うのに引き合わせて、こっちばっか嫌な思いしてるのに馬鹿にされてもうふざけんな!!」

ずっと胸中にあつた言葉が支離滅裂になりながらも口から出てくる。本当はそんなふうに思ってたのに夏希は顔を真っ赤にして叫んだ。

「フランススの説教ママっ!!」

最後に思いっきり叫ぶときびすを返して走っていった。

夏希の姿が見えなくなるまで4人はぽかんとして動くことが出来なかった。

心の汗（後書き）

心配事が心の中にあると人は心をどこかにおいていったような気分になる

まさしく私だ・・・

あう、あう、どうしよう

気になることがあつて書けないいい

湖

まるで短距離走並みに全速力で走った。どこも似たような壁しかなかったが夏希は我武者羅に走り続けて何とか城門を見ることができた。

顔を真っ赤にしながらも瞳と鼻から涙を流して脇目も振らずに走る城門を守っているゴリラさんは驚いていたが夏希を止めようと声をかける。

「あ、あの」

実は口下手だが必死の形相で声をかけるが夏希はそんなゴリラさんに目もくれずに慌てふためく門番兵たちの横を走り抜け、城下へと向かった。

どれくらい走っただろうか、夏希は暫く走っていなかったために筋肉が落ちた足が痙攣するのを感じてやっと止まった。

荒い呼吸を整えながら、その場で仰向けになる。そして強張った足をさすりながら辺りを見回すと目前に大きな湖がある。それを囲むように木々が生い茂り静けさが広がる。

どうやら街から離れた場所に来てしまったらしい。道も分からず、途方に暮れる。ここはどこだろう、早く帰らなくては。そう思うも自分が幼児のように駄々をこねて叫んだことを思い出して戻るのが憚られた。

「・・・戻る？」

自分が考えたことに気付いて腕を抱く。

「何で、あそこは私の家じゃないのに」

『戻る』なんて可笑しい。あの城は夏希の家ではないのに、他人の住む場所なのに。どうして『戻る』なんて言葉が出てきたんだろう。訳も分からず笑いが込み上げてきた。

目尻から幾つも涙が落ちることを気にも止めず腹を擦って乾いた笑い声を出した。

だがそれも長く続かず、すぐに噎せて前髪をかきあげた。瞼が痛むのを感じて湖に顔を映す。綺麗な湖は澄んでいて水面下も見ることができた。

「酷い顔だあ」

腫れぼったい目は真っ赤に充血していて小さな鼻も赤い。そんな目を擦って、自分の頬を摘んで一気に顔を水面に突っ込んだ。息の続く限り入れて苦しくなつて顔を出す。何度も同じことを繰り返して、そしてジャージの袖で乱暴に拭く。

冷たい水が顔を冷やして大分ましになったようだ。

次いでに未だ筋肉が強張っている足を水につけた。ジャージをまくりあげ、水に入れながら揉む。本当は足を温めた方がいいのだろうけれど冷たい水は気分も落ち着かせる。

「気持ちいい」

ほつつと溜め息をついて、目を閉じながら頬を撫でる風により、かさかさとして揺れる木の葉の音を感じながら一定の間隔で揺れる水面が夏希の足を揺らすのを楽しんでいた。

近くの岩に身体を押しつけ、暫くそのまましているとキューキュー

と声が聞こえる。

「・・・ジョージ？」

この長閑な雰囲気はまだ身を預けていたくて、開けてたくない目を嫌々ながら開けるとそこにいたのは黒い目を輝かせている賢そうな顔をしたイルカがいた。

湖（後書き）

ちよつとシリアスでしたかね？

基本コメディーにしたいので、そろそろお笑い要素を入れていきます

美人に化粧はいりません

夏希は足をつつくのが動物と分かった途端、悲鳴をあげる。

「ふっぎやあああああー!!」

まるで蛙のような素早さで水から足を出して飛び上がり後ろへ下がる。

イルカも驚いたように一瞬で湖の中に戻って身体を震わせていたが夏希が慄いて放心していると労るようにまた水面から顔を出して夏希を心配そうに見守っている。

夏希はビクビクしながらもイルカと向き合う。まあ、3メートル以上離れていたが。

「なあ、ぬ、へ、へ、見てるよ、見てる。あう、ギザギザの歯で私を食べるんだ」

虚ろな瞳でブツブツと言う。

しかしイルカは食べるだなんて心外だと言うように鳴く。

「はわわ、怒られた。男の子に怒られるなんて・・・あ、この間ぶりだ」

そういえば、クラスメートの男子が楽しみのとっておいたデザートプリンを食べてマジ切れされたな。いやはや食べ物の怨みは怖いと身をもって味わった日だった。

うんうんと頷いている夏希を先程まで騒いでいたイルカが静かに見つめているのに夏希は気がつかなかった。

ふと夏希はジョージという兎を克服できたのだからもしかしたらイルカもできると思い一歩一歩擦り足で近寄る。

だが、はたと首を傾げる。

「でもイルカって海の生き物だね？なんか生臭そうなイメージしかない」

生臭い、と言った瞬間、イルカが奇声をあげて勢いよく湖から飛び出して夏希に体当たりした。

「キシヤアアアア」

「ぎゃああああああー!!」

あ、臭くない。

頭の片隅で思いながら意識がなくなるのを感じた。

頬がじんと痛む感じがして覚醒した。

「あら、起きた？」

「・・・ほっぺが痛い」

どうやら夏希は湖際にイルカに激突され意識を失っていたようだった。お腹部分が濡れているため突撃された荒々しさを物語っていた。

「起きなかったから叩いちゃった」

お茶目な声に振り向くと美女がいた。切れ長の石榴色の瞳に通った鼻筋は先がつんと上を向いている。卵系のラインに腰まである力

ールしている灰色の髪。すらりとした長身の体型は物凄く羨ましい。

だが、惜しい。いや、勿体無い。色白の肌は化粧がいらぬ程きめ細やかなのに肌より白い顔があつてチークは凄く濃くて目の上はパンダみたいに黒い。口にはベージュの紅をひいていて顔に合っていないメイクがしてあつた。

夏希は頬が痛むのも忘れてガン見してしまった。

「・・・わーお、勿体無い」

「なんですつて？」

美人に睨まれた夏希は身体を小さくして土下座した。

「すみません。生まれてきてごめんなさい」

美人の怒った顔に心を打ち碎かれ半べそをかきながら平社員の間持ちが分かった気がした。

「そんなに怒つてないわよ、あんた失礼だけど」

「ふみい、返す言葉もございません」

謝りながら大きな胸を見る。ゆったりな服を着ているというのに2つの存在感あるものが誇張している。

「でかあ」

「あんた、思つたこと全部口から出てるわよ」

「あわわ」

こ、こんな美女とぜひ親しい仲になりたい。

夏希は同性にドキドキしながらこみ上げてくる唾を飲み込み、手の平をジャージで拭いて手を出す。

「あ、あの」

「な、何よ」

夏希の陰悪に押されながら後ずさっているが夏希はその距離を埋めようと更に詰め寄る。

「ぜひ、あなたのお顔に化粧させて下さい」

「はあ？」

止まるのだ、我が涙

夏希は女性の化粧品を借りて顔をいじらせてもらう。日本と同じような化粧品が多かったため使い方を聞きながら取り組んだ。

こつてりとした化粧を落として、まずは化粧水をつける。

夏希は目の前の長身過ぎる女性に岩を背にして座ってもらい、夏希その膝に跨ぎながら座り顔を掴みながら向き合っていた。

「まずは染みこませるように馴染ませます。本当は顔を冷やして毛穴を締めてからがいいんですけど」

まあ、こんなに近くで顔を見ても毛穴が見つからないのだから必要ないだろう。

次に保湿クリームを塗る。きめ細やかな肌には別にいらなくもしれんが、まあやっておこう。

全体に練り込ませて顔も引き上げる。まだ弛んでいないが将来のためだ。

すると猫みたいにゴロゴロと喉を鳴らす。目もうつとりしていて夢心地な気分のようにだった。

「気持ちいいわね」

「本当ですかあ」

しっかりと下地をしてから、うつすらと肌より少し濃い色のファンデーションを塗って色がない頬に薄いピンク色のチークをする。睫は長いため何もしないが目の周りにラメをつけたりラインを引く。本当は化粧なんていらぬ程に美人だが本人がしたいと言つたために素材を活かして全体的に薄く施した。

「少し口を開いて」

紅は真つ赤にして悪女アピールだ。真つ赤なんて似合わない人が多いがやはり美女は似合っている。こんな目で蔑まれたらゾクゾクしちゃう。

筆で形作り、うつすらと開いた口に色をつける。

情欲的だ、男なら人目をばからずに襲っていたところだな。

「できました、別嬪さん」

「ありがとう。でも別嬪じゃなくてフィナよ」

「ありゃ、名前があるってことはもう野郎の物なんですかい!？」

そんな、そんな。私がせっかく綺麗にしたって言うのに別の男の唾がついているなんて。

目の前で絶望ポーズをとっている夏希を綺麗に無視してフィナは夏希の腰を寄せてさらに密着させ、おでこをくつつける。

「で、何で泣いてたの？」

「え？」

「あんだ、自分が泣いてたのも忘れてんの？」

「あー」

「・・・あんたって」

いや、忘れてたわけじゃないよ。うん、ただ悲しみを忘れるほどの美女に出会ってしまっただけであって。

「で？」

「いえ、フィナさんのお耳を汚すにははばかられまして」

「いいから早くいいなさい」

フィナの睨みに1秒も経たずに夏希は屈服した。

「あう・・・実はですね。その、赤の他人に知らない国に連れてこられて、しかも嫌がらせとしか思えない恩返しをされまして。最後には罵られ、もう今まで溜まっていた鬱積が出てきてしまった、のです」

身ぶり手ぶりを使って表そうとするもの、フィナが近くてあまり身動きが取れない。

「で、でもですね。皆さん優しくしてくれて本当に、あの嬉しいん

ですよ。ただ、暴言を吐いてしまったためにどう戻ればいいか、分からなくて」

「ふーん」

真剣に悩んでいる夏希の前で、どうしてもよさげな声を聞くと先程止まっただけの涙腺は緩む。

「っ、うう、な」

向き合ってるため泣いているのが分かってしまう。なので夏希は顔を伏せてフィナの胸元に顔をつけて肩を震わせる。

「あんた、泣いてんの？」

「先程、猛スピードで、虫が、目にぶつかっ、た」

「・・・はいはい。あんたも辛いわね。知っている人が誰もいない場所に連れてこられて大変だったでしょう」

優しく夏希の短髪を梳いてくれる動作に胸が温まり、次から次へと涙が出る。

「優しく、しな、い、でえ」

本当は優しくしてもらって嬉しい。優しい言葉に仕草。

でも今はやめて欲しかった。

止まるのだ、我が涙（後書き）

あづい　・　・　・

とける　　う　　う　　う　　う　　う

お姫様ではないのです（前書き）

久しぶりですな^^

お姫様ではないのです

ひとしきり泣いた後、フィナにまるで子供をあやすかのようによしと頭を撫でられていると落ち着いて真っ赤に腫れた目でフィナを見上げるとフィナの煌びやかな服が夏希の涙で大きな染みを作っていた。

ああ、涙で世界地図ができた。じゃなくて、ああ、服が。服があ。

「服が・・・」

「胸が気持ち悪いわ」

「あうあう」

「別に気にしてないって」

今にも爆発しそうな胸には似つかわしくない染み。服の色をより一層濃くしてしまっている。申し訳ない気持ちでいっぱいだがフィナの寛大過ぎる心の広さにときめいた。

男だったら君の心にメロメロさ。

「じゃ、行きましょうか」

感慨にふけているとフィナがぼそりと呟くが、どこに行くのか見当もつかずに頭を傾げる。フィナも夏希の動きに合わせて首を傾げるが夏希の子供っぽさとは違い、どこや妖艶な雰囲気醸し出していた。

「どこに？」

「王宮に決まってるじゃない」

「・・・はい？」

夏希の思考回路は凍結した。

フィナの言っている意味が分からない。王宮に行くって王宮！？
王宮ってフランスがいるとこだよね。先程夏希が逃げてきた。

「い、や、だ」

「あなたに否定権なんてないわよ」

「人権を侵すことはできない」

「大丈夫。私、動物だもの」

「ぐっ」

そうだよ、ここは動物王国じゃないか。いつも皆が人間の姿にな

つてたから忘れてたよ。

だが、はたと思う。フィナは何の動物なのか。全く分からない。聞くべきか、いや蛇とか言われたらもう抱きつけない。

うん、知らぬが仏だ。

一瞬の逡巡のあと笑顔をつくって自分の問いに蓋をした。知りたという生命を脅かす問題に目を瞑り、平穏な日々を過ごそうではないか。

「さつさと行くわよ。私も用事あったし、丁度いいわ」

「それは嫌あ」

逃げ回ろうとフィナの手から立ち上がろうとしたが、それよりも早く腰をもどされる。それでも夏希は逃げようと腰に回された手をどかそうと踏ん張るがびくともしない。

そんな馬鹿な、夏希は毎日腹筋背筋、腕力、持久力をつけているのに。目の前の労働などしらぬどこかの令嬢のようなフィナに負けるとは思っていなかった。

第一、腕の細さが一緒なのにどうして、この手は動かないのだ。違うのは夏希の日に焼けた腕とは違い、とても白いだけだ。

「馬鹿ね、強いのよ」

愕然とする夏希に対しフィナは悠然と微笑みかける。当たり前でしょう、とすら言葉が聞こえてきた。

「ぬぬぬ」

どうあがいても鎖のようにびくともしないフィナの腕に夏希は白

旗を上げるしかなかった。

無駄な足掻きを止めた夏希の膝の裏に手を回して、もう片方で夏希の背中を支える。どこにそんな力があるんだと、聞きたいが目下の問題はそれではない。つまり、今の体勢だ。

「こ、これは所謂おおおお、お姫様でででは」

「そうとも言っけど、あんた別に姫じゃないんだからお姫様じゃないでしょ」

「・・・ふむ、では夏希抱っこかな」

「・・・そうね」

なんだか上から深い溜息が聞こえた気もするが、そこは長年培ってきたスルースキル、聞きたくないものは聞き流せ、だ。

こうして夏希は夏希抱っこでフィナに抱えられ王宮へと連れていかれた。

中年オヤジ（前書き）

まあ不健全なモノが入っていますよ
うん、心が清らかなあなたは見ない方がいいのだ

中年オヤジ

フィナは夏希が走ってきた距離をいとも容易く夏希を抱き上げながら歩いて、着々と城に近づいている。

「まだ心の準備があ」

「身体の準備ができてれば大丈夫」

いや、そういう問題では。

突っ込もうとするが、それより先に夏樹がどんなに望んでも届かない大きな胸に目がいった。

じーつと見つめているとその熱い視線に気づいたのか、フィナが苦笑する。

「触ってみる？」

「いえいえ、そんな。女性の胸を触るなんて、なんて破廉恥な。男の風上にも置けぬ奴ですよ」

「あんだ、女でしょ」

胸周りが怪しいけど。ぽそりと言われたがスルーだ。わざわざ自分が傷つく道は選ばん。

「ええのですか!！」

「別に減るものじゃないしね」

「へっへっへ。本当にいいんですかい」

「中年親父みたいで嫌」

確かに胸だけに注目している夏希は親父だ。しかも権力を盾に嫌がる部下に対し「いいじゃないか、君と僕との仲じゃないか」なんて言いそうな上司のオッサンだ。薄らハゲの。

そんな容貌を浮かべてしまった自分に嘆く。この、ど変態め。

あう、たかが胸じゃないか。何だい、何だい。夏希だって大人になれば大きくなるわい。

だが羨望の眼差しで見ってしまう夏希はやっぱり親父で。

両手でフィナの胸に触った。

「・・・ん？」

だがあるべき触感がない。なんか少し固いのだ。

「あは、バレた?これ、造りもの」

なんと美女さんも胸に困っているとはお互い大変ですな。

「今度バストアップの方法、教えてあげますね」

こっそりと耳うちするとフィナは悪戯を思いついたかのように、にやりと笑った。

「そんなことしなくても、あるわよ、方法。しかも簡単に」

「何ですと！是非ご教授お願いしたい」

やっぱり今からでも努力は必要だね、うん。努力の積み重ねが功を生むのだから。いや、別に毎日やっている訳じゃないよ。巨乳なんて羨ましくないんだからな。

「いいわよ、毎日してあげる」

「へ・・・？おわっ！」

意味が分からずに首を傾げるとフィナがいきなり膝裏に入れていた腕を外した。とっさのことでバランスを崩してフィナの首に両手で掴まる。

フィナは左手だけで夏希を抱えている。こんな細腕に凄い力が、感嘆するよりも早く自分が落ちる姿を想像する。

「いきなり何を、って、ふにゃ、あ」

身体を片手だけで支える不安定さに大丈夫か尋ねようとしたができなかった。夏希の胸の上にある手のせいで。いや、その手はあるだけでなく動いている。つまり夏希の胸を揉んでいるのだ。

「ふあ、にゃにゃにを。あ、や。駄目だ、って、あ、あん」

艶めかしく動く少し女性にしては筋張った手が夏希の左右の胸を

駆け巡る。

「あら、あんた。結構胸あるじゃないの」

そう言いながら手の動きを止めない。

「ふおっ!？」

顔が赤くなるのを抑えながらフィナの手をなんとか止めさせる。

「ぜ、はあ。じ、自分でやります」

「自分で揉むの? こういうのは男性に」

「バストアップの体操をしますので充分です!!」

夏希はぐったりとフィナの肩に顔を乗せる。

「残念」と呟きが耳のすぐ側で聞こえたと思ったらフィナが片目を瞑りながらさらに続ける。

「もし揉んで欲しかったらいつでも言って頂戴ね。やってあげるわ」
「よ」

「結構です!」

夏希の悲鳴が上がった。

胸が潰れますから

先程の胸揉まれ事件から夏希はフィナから腕の中から少しでも距離をとろうとしたがフィナは決して離さなかったために夏希は早々に諦めて、城に着いたらどうしようかと頭を抱える。

（いや、別にそこまで怒ってたわけじゃないんだけどね。ただ、うーん、何と言うか。皆が仲良しだから焼き餅とか？ あ、焼き餅食べたい）

ぷくーつと膨らむお餅を想像してぐーとお腹が鳴る。1人悶々と考えるがすぐに違うところに脱線してしまう。

「なに百面相してるのよ？」

唸っているとフィナがコツンと額を合わせる。

「ちょ、前見て！」

額を合わせながらも歩くフィナに危機感を感じる。というか自分が落とされるのではと心配する。

「はいはい、あんたは子供なんだから難しく考えなくていいのよ」

その言葉はすっと入った。

夏希は子供だからな、難しく考えるな。自分が思った通りに進めばいい。

それは、もう聞くことのできない言葉。どんなに会いたいと思っても、どんなにその腕に抱かれないと思っても叶うことのできないもの。

単純だけでもその言葉は夏希にとっては何よりも大事で大切な言葉だった。

「あう・・・」

「何よ、あたし何か変なこと言った？」

今すぐ泣きそうな夏希の顔を見てフィナはぎよつとする。

きつく言いすぎただろうか、少し不安になったフィナだったが夏希はふるふると首を横に振って瞳にたまった涙をこらえる。

「違うのですよ。少し昔を思い出しただけなのです」

「昔？」

「はい、昔フィナさんと同じようなことを言ってくれた人がいたんですよ」

「・・・そう」

フィナが夏希の顔を至近距離で見ると夏希は柔らかい微笑を浮かべていた。

「そう、ならいいけど」

まだ納得のいかないことばかりだったが夏希の顔を見て言葉を押し込む。

「私、フィナさんが大好きですよ」

「ありがとね」

夏希はフィナの首に齧りついてしかと離さない。

何かが夏希の琴線に触れたのだろう。それは夏希にしか分からないがフィナに対して親しみを感じる行為だ。最初に出会った時はやはり緊張をしていたようだが、今はまるで母の胸に齧りつく子供のようだった。

「あら、そうこうしているうちに着いたわよ」

フィナに抱えられながら首を正面にまわすと大きな城が見えてくる。

「あうー!!」

しまった、結局何の案も浮かばずに来てしまったよ。まずいと頭を抱え出すがフィナの足は止まらない。そして夏希の腕を掴む力も何故か強まった。きっと夏希が逃亡すると睨んでいるのだろう。

「ふはは、ならば望み通りやってやろう」

夏希がじたばたと暴れ出そうとしたがフィナが先手を打ってそれを止める。

「また揉むわよ」

「いやああああ!!」

揉むわよと言っておきながら、もう揉んでいる。夏希は泣きながら逃亡をしないとフィナに宣誓をして、やっとのことで離れてもらったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0806s/>

動物の王国

2011年9月15日01時03分発行